関東学院
学院史資料室ニューズ・レター

No.22
2019.3

関東学院の歴史と宣教師

目次

はじめに …… 2
関東学院中学校高等学校 100 周年 …… 3
関東学院と宣教師 …… 4
ベンネット Albert Arnold Bennett …… 16
クレメント Ernest Wilson Clement …… 18
資料の紹介『開教 50 年記念講演集』 …… 20
テンネー Charles Buckley Tenny …… 22
グレセット James Fullerton Gressitt …… 26
タッピング Henry Topping …… 28
コベル James Howard Covell …… 30
関東学院で奉仕した主な宣教師たち …… 32
横浜外国人墓地に眠る関東学院ゆかりの宣教師たち …… 34
学院史資料展 2018
「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」 …… 36
編集後記 …… 43
関東学院中学校高等学校 100 周年記念誌 …… 44

関東学院史上最初の建物、創立当時は仮校舎として授業や礼拝に使用され、本校舎が建てられてからのちは寄宿舎となった

最初の本校舎を普門院階段から見上げた写真

1929(昭和4)年4月、J. H. モーガンの設計により竣工した中学部本校舎
老朽化が著しく意匠を継承した建物に建て替えるため2016年8月に解体

はじめに

関東学院　学院長　　松田　和憲

ここに、ニューズ・レター No.22を皆様のもとにお届けできることを大変嬉しく思います。

この小冊子は、ここ数年の傾向として各号で一つのテーマを定めて、多くの方々の執筆、資料提供などのご協力を得て特集号を発行してきました。因みに、第19号として「学院のキリスト教教育と音楽（パイプオルガン）」と銘打っての特集、第20号は「キリスト教教育の礎となる共同生活『学寮』」と題しての特集、そして、21号では「学院各校の創立の頃『坂田記念館』」に関する特集を組んでおります。

わたしもこのたび、学院長に就任し、注意深く各号に目を通してみましたが、いずれの号も、興味深い逸話や埋もれがちな出来事が詳細に記載されており、歴史的資料として極めて貴重なものであることを改めて感じさせられました。

本号では「関東学院の歴史と宣教師」と題して、創立130年を超える学院の歴史の中で、重要な役割を担ってくださった宣教師の方々の献身と労苦を再度想起するために特集を企画いたしました。

すでに歴史文書、小冊子等で、その歴史的貢献や働きに関して幾度も掲載され、話題になっている宣教師の方々もおられます。敢えて、ここに歴代の宣教師の特集号を組むことにした理由は、時間の経過と共に、徐々に第一次資料が散逸してしまうことへの危惧、さらには、直に宣教師の方々から薫陶を受けた世代の方々が少なくなっている事態を考慮しての事です。

今の時点で関東学院の草創期に生涯を捧げて「学院の礎」を築いてくださった宣教師の方々の足跡を辿ることによって、次世代の人々の記憶にしっかりと留めて欲しいとの願いがあったからです。

本号を簡単に紹介いたします。冒頭では今年で関東学院中学校高等学校が100周年を迎えるということで、元教諭花島先生が一文を寄せてくださりました。

次に、大島良雄先生が「関東学院と宣教師」と題して12頁に亘る長文を本号のために執筆してくださいました。この大島先生の文書は、本号の中核部分とも言える特集記事で、先生は、以前までの宣教師諸氏に関する個別な論述とは趣を異にして、歴史的経緯を踏まえ、概観的かつ文脈的に考慮を加える形で、歴代の宣教師諸氏の主な働き、業績について、端的かつ明快に論述してくださりました。それに学院史資料室の写真画像などを追加し、外崎みゆき氏が編集してまとめ上げたものです。

ここに、大島先生のご尽力に対して、心からの感謝の意を表したいと存じます。大島先生の文書を総論とするならば、各論的な意味合いで、宣教師諸氏とゆかりの深い先生方が他で書かれた文書を了解を得て、転載させて頂きましたこと、合わせて感謝申し上げます。

本書が、学院の歴史を紐解き、新しい歩みを模索するための一助となることを願い、皆様のもとにお送りいたします。

金沢八景キャンパス航空写真

関東学院中学校高等学校100周年

関東学院中学校高等学校　元教諭　　花島　光男

1966年、大学を卒業した私は関東学院中学校高等学校に就職した。この年度開始直後の5月17日に、関東学院開学80周年の記念式が横浜文化体育館で盛大に挙行された。この時に合わせて、「巍然とそびゆる」の学院歌がつくられ、『恩寵の生涯』が待晨堂より発行され、また水船六洲小学校長による鉄製の魚の彫刻が教職員に配布された。そして翌1967年1月27日には例年と同様に第48回関東学院創立記念式が行われた。毎年この日が関東学院の創立記念日で、記念式会場は三春台と六浦が交互に使用された。六浦で開催の時は出席する教職員のために三春台より貸し切りバスが用意された。

1969年秋三春台で関東学院創立50周年記念式典があり、その年12月に坂田祐は召天された。

1974年私は当時の友井篤校長（院長事務取扱兼務）より、開学80周年に続き90周年を開催することの妥当性を検討する委員に任命された。委員は友井篤、片子沢千代松、佐々木敏郎、細川道弘と私の5名であった。私はまだ学院の歴史についての認識浅く、説明を聞くことで精一杯であった。委員会は数度の協議を重ね、横浜バプテスト神学校、東京築地に始まる東京学院、横浜で開始された関東学院の歴史とその関係を検討し、関東学院の3つの源流と説明した。これにより関東学院の歴史は1884年の横浜バプテスト神学校から始まり、神学校開始の10月6日を創立記念日とした。そして1984年、関東学院創立100周年記念式典が新設の大学釜利谷キャンパスで挙行され、『関東学院百年史』が発行された。しかし三春台ではこれ以後も、引き続き1月27日も創立記念日とし、二つの創立記念日をもって現在に至っている。

このころ全国のキリスト教学校の中に自らの学校の歴史を検討し、学校の歴史により以前から教育活動が開始されていた事実を組み入れ、創立年を遡らせる動きがみられた。

バプテストのミッションによる男子普通教育は築地の東京中学院に始まり、まもなく市ヶ谷佐内坂に移り東京学院となった。佐内坂は校地が小さくここでは将来の発展は望めないとの考えによりミッションは、東京学院中学部を閉校して、横浜で新しい学校を開設することにした。そして2年後に横浜の三春台に中学関東学院が創立された。これは東京学院が校名を変更して移転したのではなく、新しい学校の創立であった。1919年1月27日、横浜市内外の関係者に開校を披露し、以後毎年この日を創立記念日とした。新しい学校の教育は坂田祐にゆだねられた。それは1919年、前年11月に第一次世界大戦が終結した直後で、パリ講和会議が始まり、世界は平和の到来に安堵したが、東アジアでは日本の勢力拡大に対し民族自決の運動がおこった時でもあった。坂田はこの希望と緊張の時代に即したキリスト教教育を考えその思いを、「人になれ　奉仕せよ」の校訓で表現した。

関東学院は1927年に佐内坂に残されていた東京学院神学部、高等学部を吸収した。それにより関東学院の歴史は35年遡るとした。しかし関東学院の始まりは坂田祐による1919年、横浜の三春台である。横浜における唯一の男子キリスト教学校として関東大震災、十五年戦争と苦難の歴史を辿り、戦後いち早く男女共学を実現し、常に校訓『人になれ　奉仕せよ』を説き、キリスト教教育をしてきた。

2019年、三春台の関東学院中学校高等学校は100周年を迎えた。

三春台校地航空写真

関東学院と宣教師

元大学教授　元学院宗教主任　**大島　良雄**　述
学院史資料室　**外崎　みゆき**　編集

序

1873年2月に日本宣教を開始したアメリカン・バプテスト宣教師同盟American Baptist Missionary Union は教育事業として1884年10月6日に横浜バプテスト神学校を創設した。関東学院は其の学校を第一の源流として、その日を創立記念日としている。

宣教師同盟は男子教育機関として1895年に東京築地に東京中学院を開設し、1899年秋に牛込区佐内坂の新校地に移転、東京学院と改名し、1905年に高等科（後に高等部）を併設した。

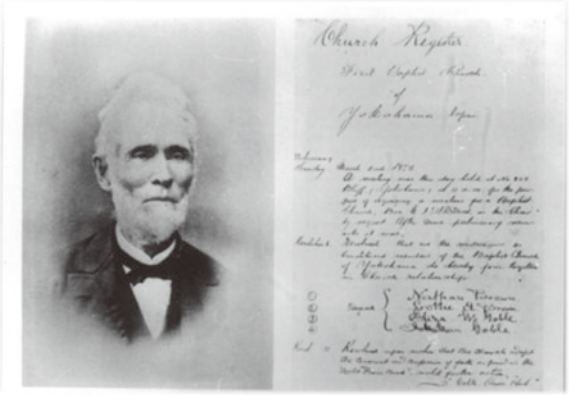
この学校が第二の源流である。同校の中学部は1917年に閉校されたが高等学部と、後述する日本バプテスト神学校が1919年に合併して同校神学部となり東京学院は存続した。横浜バプテスト神学校は1910年10月に南部バプテストSouthern Baptist Conventionと合同して東京に日本バプテスト神学校を開設したが、1919年に解散し、北部バプテストの神学校は東京学院と合併し同校の神学部となった。

1919年4月に横浜に中学関東学院が開設された。其れが第三の源流である。1927年4月に中学関東学院と東京学院高等部、同神学部とが合併して財団法人関東学院となった。この様にして神学校系列の第一の源流と東京学院系列の第二の源流と、中学関東学院系列の第三の源流をもつのが現在の学校法人関東学院である。それ故『関東学院と宣教師』について語る時には関東学院という名称をもって設立された学校に関係した宣教師だけでなく第一の源流である神学校の宣教師にまで遡ることになる。限られた紙面なので関係した宣教師すべてについて記述することは出来ないが、記述から漏れた宣教師も学校の運営、教育、特に宣教活動において大きな貢献をされたことは言うまでもない。

I. 横浜バプテスト神学校

アメリカン・バプテスト宣教師同盟の日本宣教は1873年2月のブラウン夫妻 Nathan Brown（1807-1886）と**ゴーブル**夫妻 Jonathan Goble（1827 -1896）の来日に依って開始された。

ブラウンは横浜教会の牧師として活動する傍ら、嘗て彼がアッサムで活動した時に聖書をアッサム語に翻訳し、賛美歌を編集したように、日本でも1879年8月に新約聖書を翻訳・出版した。これは川勝鉄弥を助手としての彼の単独の事業であって、聖書翻訳委員会の聖書より数か月前に完成した日本最初の新約全書であった（8月に分冊のまま、年末には一冊本と二冊本の『志無也久世無志与』として出版した）。



ブラウンが来日したのは彼が65才の時で、「今後10 年生きて、日本人に神の御言葉を紹介し、横浜に50 名の信徒を持つ教会が出来れば、私の務めが報いられたと思う」と、述べた。彼は日本に住んだ13年の間に、横浜より30km以上離れたことはなかった。終日書斎にこもり、窓から富士山を眺めて英気を養い「その風景が私の生命を延しているように思う。雪を頂く霊峰が創造主を仰いでいる所を見ると、何とも言えない崇高な感に打たれる。」と記している。彼はその様にして日本で最初の聖書を翻訳したのである。（Japan Baptist. 263号　2014）

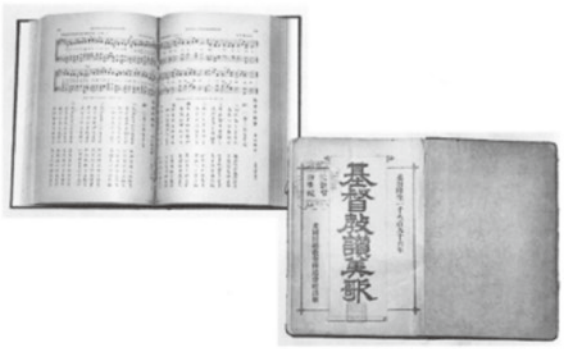
多忙なブラウンの活動を助ける為に**ベンネット**夫妻 Albert Arnold Bennett（1849-1909）が1879年12月に来日した。彼は日本人伝道者養成の必要を感じ、私的に伝道者の教育をしていたが、1884年春、京浜地区の在住宣教師フィッシャー Charles Henry Day Fisher（1848-1920）と、ポートThomas P. Poate（1848-1924）と共にブラウン宅において神学校創設を協議し、同年10月6日に自宅の近くの西洋館を校舎としポート、**フィッシャー**を教師、彼が校長として神学校を開設した。当時、日本に在住したバプテスト派は宣教師男子5名、女子8名、日本人説教者は5名、教会数10 、会員数286名と言う弱小な教派であった。

バプテスト派は宣教師個人の自主的、主体的活動、また個別教会主義の伝統を重視したので、日本に於ける伝道活動を総合的、計画的に運営する組織に欠けていた。その様な状況の下で設立された神学校なので必然的に金銭的、物理的、人材的な困難に直面したが、ベンネットの熱意と努力によって継続された。

1886 年 12 月に**ハリントン** Charles K. Harrington（1858-1920）が来日し旧約聖書の授業を担当した。彼が着任した当時の教師は新約聖書と説教学を教えたベンネットと旧約聖書担当の新米の教師ハリントンの二人しかいなかった。

1888年10月に学科過程を定め四年制の神学校制度を確立した。彼はまたベンネットの後を継いで夏季休暇中は信州の伝道に力を尽くした。更に特筆すべきことは、後に彼は狭隘な教派主義に捉われず、聖書協会の聖書改訳事業に協力した（1917年の改訳聖書が原典に忠実で平易な訳文の聖書になるよう貢献した）。

1894年に神学校は創立10周年を迎え、10月22日に教室棟、寄宿舎の献堂式が挙行された。学校の施設が不備であるという理由で就学を予定していた青年が他の神学校に移るというようなこともあったので、日本在住のバプテスト派の宣教師が一致して神学校を横浜に定着させる為に校地を改良し、老朽化した建物を新築する資金を得るようと努力した。



一方、創立者ベンネットは校長の任を辞して教授になり、代わってデーリングJohn Lincoln Dearing（1858-1916）が二代目校長に就任した。

ベンネットの美しい人柄を偲べる、彼の作詞、夫人の作曲した賛美歌48番「しずけき夕べの」3 節を紹介する。

日ごとわがなす　愛のわざをも
ひとに知らさず　かくしたまえや

また彼を敬愛した捜真女学校と関東学院中学部の教師であった藤本伝吉が作詞した賛美歌213番「宣教者」3 節はベンネットの教えや人柄の中に「目に見えない主の姿を」を見たという思いを託したものである。

わが主の御影の　みえわかぬ時も
さやかに御旨を　われらにさとすは
そのこえ
神の人よ　神の人よ
みめぐみ永久にあれや

関東学院の源流である横浜バプテスト神学校はこのような優しく美しい信仰の人によって創設された学校であった。

デーリングは1896年の報告で「学校は路傍伝道を毎日実施している。学生は一団となって一週間一つの場所に出かける。集会では夫々が短く話し、一緒に賛美し、トラクトを配布し出来るだけ個人的な働きかけをする。学生たちは素晴らしく、熱心で霊的である。」云々と言う。またこの時代は新神学（自由主義的神学思想）やユニテリアン（三位一体論に反対しイエスの神性を否定し神の単一性を主張する）が日本に入り込んで来て、日本のキリスト教界を混乱させていた時であったが、「バプテスト神学校では聖書主義、保守的な態度と伝道精神を重視している。」と報告している。（*American Baptist*

Missionary Magazine. 1896)

1903年の宣教師通信にデーリングは学生達について報告し、彼等の殆どが成熟した人達で思慮深い、10年余りミッション・スクールの教師をしていた人、警察官として有能だった人、小学校の教師だった人、軍人だった人、僧侶だった人など、多様な経歴、経験の持ち主がいると紹介しているが、一方基礎学力に欠ける者もあり1907年にはカリキュラムを大幅に改正し神学生に英語を教え、英語の資料を読めるようにさせた。また1908年の報告では、今までにないほど多くの学生が学んでおり、優れた学生が本科で学んでいる。其れは以前上級コースと呼ばれたもので、ギリシャ語も学ぶ様になったと報告している。(ABMM.1903)

1908年デーリングは辞任し日本、中国、フィリッピンを担当するGeneral Missionary巡回宣教師に就任し、代わってパーシュレー Wilbur B. Parshley が校長に就任した。丁度その時期に、時代の変遷による社会的要請によってアメリカン・バプテスト宣教師同盟の母体である米国北部バプテスト諸教会もその活動の効率を高める為に1908年に北部バプテスト同盟Northern Baptist Conventionを形成し、宣教師同盟はAmerican Baptist Foreign Missionary Society に改組された。それによって、其れまでのバプテストの個別教会の独立主義independence of local churches に基づく活動を教派として効率的に機能する体制に変革することが求められるようになった。デーリングはこの新しい方策に従って日本、中国、フィリッピンの活動を総括する立場に立つことになったが其の制度は不評で2年にして廃止された。横浜に戻った彼は東京に移転した後の元神学校の教室や施設を利用して英語学校、商社マンの為の寄宿舎を開設して伝道した。

パー シュ レーは 1890 年 にニュートン神学校を卒業し、4月28日に宣教師同盟の宣教師に任命された。夫妻は夫人の叔母に当たる根室のカーペンター夫人Mrs. Carpenterの活動を助ける為に来日した。1901年10月に神学校教授に就任したが夏季休暇中は根室での活動を継続した。1908年デーリングの後を継いで神学校校長に就任した。1910年に福岡バプテスト神学校と合同して日本バプテスト神学校が東京に開設された時には校長になった。

Ⅱ. 東京中学院・東京学院

バプテスト派は他教派より大きく遅れて男子の中等、高等教育を始める事になるが、その背後の事情について、同校閉校当時の理事長テンネー Charles B. Tenny が大正6年1月6日の『基督教報』に「我最初の宣教師等は神學を教授する以外の學校を設立するを欲せざりき。〔中略〕彼等は伝道

の為めに捧げられたる金員をば官立諸學校の如き普通の課目を教授する學校を設立する為めに使用するは不正なりと認めたるなり。〔中略〕兎に角中學校の必要を感じて我學院は設立せられたり。然れども其企圖たるや寧ろ嫌厭の情を以て迎へられたりき。為めに健全なる基礎の上に設立すべき充分なる供給も、將た其の将来の發展に要する準備も欠かれたる也。而も尚斯る事業の為めに多大の経済的義務を盡すを欲せざる他の理由あるを忘る可らず。」云云と、閉校せざるを得なくなる原因として開学当初の宣教師達の不本意な態度の存在を明らかにしている。この様な困難な状況の中で社会的要請と宣教目的のために宣教師同盟は東京築地居留地に東京中学院を開学し、**渡瀬寅次郎**を院長、クレメントを教頭とした。

クレメントは開学の目的は「宣教に使命を感じている少年に、この学校で訓練を受けさせ、後に神学教育を受けるに相応しい準備をさせ、将来キリスト教の良い働き手にさせる事である。更にこの新しい学校は牧師にならない少年達の生涯に役立つ有益な教育と訓練をするのが目的である。即ち、日本にあるバプテスト教会の為に真面目で有能な平信徒を教育しようとするものである。」と言う。(ABMM. Nov. 1895)

クレメント Ernest Wilson Clement は 1860 年 2 月に Dubuque. Iowa に生まれ、1880年にUniv. of Chicago を卒業、1883年同大学より修士、1908年Colgate Univ. よりD.D.を授与された。彼は東京在住の宣教師で横浜バプテスト神学校開学当初の教師の一人であったフィッシャー Charles Henry Day Fisher の斡旋で1887年に茨城県尋常中学校から招聘されて来日し、1891年まで教師として働いた。1894年教育宣教師として再来日し東京中学院校長に任命された(校

長とあるのは米国向けの報告で、正式には先の茨城中学校の校長であった、札幌農学校卒業の渡瀬が校長であった)。

学校の一つの特徴は寄宿制度の採用で大半の生徒は寄宿舎に入り共同生活をしながら自主、独立、自治の精神を養い、また霊的生活の訓練を受けたことである。1897年9月新学年が始まる直前に学校は台風により建物の屋根を吹き飛ばされるという大きな被害を蒙り、学校の存廃が問題になる大きな困難に遭遇した。

クレメントの活動を援けた宣教師**タッピング** Henry Toppingが GLEANINGS Sept. 1897 に寄せた当時の報告に寄宿舎にふれた記述があるので紹介する。「生徒達の健康は湿った着物や部屋で寝るので一時は非常に心配な状況であったが、今では病人がいないと報告出来る事を喜んでいる。しかしクレメント教授は『少年達』に対して慣例になっていた見回りの為に屋根のない建物で夜間長い時間を過ごし、度々片手に傘、他の手に灯火を掲げて、生徒達が雨に濡れたままで眠る事がない様にと、水しぶきをあげ乍ら部屋から部屋を巡回した。心配と風雨に身を曝した事によって、疲れ果て、遂に今重い病気に罹ってしまった。」と罹災直後の状況を報告している。これによって、被災の状況を知ると同時にクレメントの人柄にも触れる事が出来る。

1899年私立学校令公布に伴い学校設立願いを東京府知事に出した時、学校名を東京学院に改めた。

世話になったバプテスト外国伝道主事**ダンカン**S.W.Dunkanを記念して学校の英語名をダンカン・アカデミーとした。また築地を出て牛込区佐内坂に移転した。(当初は寄宿舎のみ、校舎は翌年完成した。)

クレメントは1909年の開教五十周年記念講演に於いて「日本に於ける基督教教育の情態及結果」というテーマで講演したが、その中で「學校があまり大にして適當に管理する事が出來ず又級の生徒數あまりに多きがために教師も滿足なる働をする事が出來ないと言ふ事は苟も官立學校に教鞭をとり居る者の皆均しく喞つ所で御坐います。勿論教師が單に講師である場合は如上の説が其効力を失ふものでありますけれども此點に於ても理想を一層高くする事は望ましき事で御坐います。即ち教師は單に講義する機械でなく生徒は單に之を寫す筆耕生でないやうにならねばならぬと言ふ譯で御坐ります。以上陳べ來りたる思想が日本に於ける基督教々育を政府の教育方針より全く別にし得べき諸種の點を私共に教ゆるのあります。則ち級の生徒數を小數に限りて各生徒をして十二分に教養開發の特權を享受せしむる小規模學校主義を實行して之を盛ならしむる事が出來る絶大なる機會があるので御坐います。」と、年来彼が実践して来た少数主義を強調し、彼の学校運営方針を明らかにした。

彼は休暇を終えて1911年9月に再来日した直後の9月13日にはバプテスト派の宣教師を辞任した。その理由は彼の不在の間に学校の基本政策の変更が在日宣教師の間で支配的になったからであった。即ち学校と言う公的事業が個人的な営みの枠から、営利的側面を重視する組織的な運営に移管されなければならない時代的な要請であった。

1913年テンネーが学院の理事長に専任された。理事会は宣教師会議の決議に同調して新しい校地の獲得を目指して委員会を選任した。すでに何度も彼の名前が挙げられたが、此処で彼の略歴を紹介する。

Charles Buckley Tenny (天寧と称した)は1871年ニューヨーク州ヒルトンの農家に生まれた。1897年Rochester大学卒業、1900年同大学神学大学院を卒業し、同年10月宣教師として来日し、最初の8年間は神戸、京都とその周辺の伝道に従事した。

1908年デーリングが神学校校長を辞任した後を受けて、神学とギリシャ語の教授として同校に招聘された。同校が南部バプテスト神学校と合併して日本バプテスト神学校として東京に開校した時には同校の教授に就任した。同校は校長がしばしば替わったが、そこで二度校長を勤めた。1913年には東京学院の理事長に就任した。これがこの時までの略歴である。

時流に抗し得ず1917年3月に東京学院中学部は閉校することになるが彼が記述した記事「東京学院の閉校に就いて」が『基督教報』1916年381号に掲載されている。「学校は現在地では発展が困難、東京近郊に移転すれば生徒を集めるのに不便、市内は土地が高く購入できない。他府県に移転するには管轄の問題があり一旦閉校する必要がある。米国の理事会の了解を得て、来年3月で閉校するが、将来に関しては何らの約束を為し得ない。(要約)」とある。

この学校で働いた宣教師にタッピングHenry Toppingが

いた。学院の六浦キャンパスの経済学部研究棟と6号館の前に彼ら一家を記念する美しいTopping Memorial Pondがある。彼は1857年7月にウィシコン州デルトンに生まれた。ロチェスター大学、同大学神学校で学び、1892年モーガンパーク神学校を卒業した。1895年11月に来日し東京学院の教師に就任したが、来日前の3年間はサウスカロライナのベネディクト大学で教え、また解放奴隷の間で伝道に従事した。

彼が来日したのは38歳の時で立派な学歴と経験を有し、東京学院ではクレメントを援け、同時にバプテストの東京地区の諸教会の内、芝、四谷、材木町等の諸教会担当宣教師として働き、自宅ではバイブル・クラスを開いていた。学院が佐内坂に移転した時、隣接する陸軍士官学校の馬術教官であった中村軍曹（後の坂田祐）が、そのバイブル・クラスに出席したのが縁で、彼が「タッピング師に就き、しばしばキリスト教の説教を聞き、かつ疑問を質し、一歩一歩信仰の道に進みつつあり」と、その日記に記したように、1903（明治36）年5月3日バプテスマを受け四谷教会の会員となった。（坂田祐『恩寵の生涯』）

彼は日露戦争に従軍し、帰還・除隊後東京学院中学部第四学年に入学、その後第一高等学校、東京帝国大学を卒業し母校の東京学院に就職し、1919年中学関東学院が横浜に設立された時に初代院長に就任した。

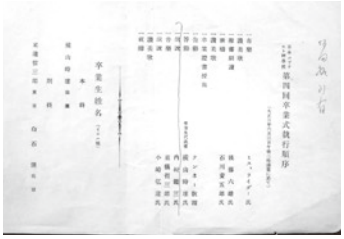
他方タッピングは休暇後再来日した際、任地が盛岡地区に変わったが、同地で多くの人材を発掘養成した事で知られている。引退後は賀川豊彦の英語秘書であった娘と共に夫妻で賀川の活動を援けた。

Ⅲ. 日本バプテスト神学校

ワインドはその著*Seventy Years in Japan* でこの神学校の合同は北部のアメリカン・バプテスト宣教師同盟と日本人バプテスト同盟と南部のMission of the Southern Baptist（南部バプテスト宣教団）の三つの団体を基盤として開始されたと、指摘している。枝光泉はこの神学校の創設についての南部バプテスト教会の見解を「南北両神学校の合同は時代の要求と、人物の融通と、維持費の経済などを理由に、南部バプテスト教会の日本人の反対を南部ミッションが宥めるような形で合同が進められた。其れは日本での伝道の後れを、より良い神学校を作る事で南北協力して補って行こうとする気運が南北バプテスト・ミッションに此の時盛り上がっていた。」と背後の事情について述べている。（枝光泉『宣教の先駆者たち』）　此処で設立の経緯を詳しくのべる事は出来ないが、日本バプテスト神学校は東京市小石川区表町100の仮校舎において南部バプテストの福岡神学校と北部バプテストの横浜神学校が合併して1910年10月に開校した。横浜からパーシュレーが校長、テンネー、ハリントン、高橋楯雄が教授に、福岡から千葉勇五郎が教頭、ボールディン、佐藤喜重郎が教授として加わった。

この学校のその後の推移について詳しく述べる余裕がないが、1912年に休暇帰国したパーシュレーは校長を辞任した。其の後、東京学院と合併して東京学院神学部となるまでの8年間の状況は『基督教報』1918年439号に日本バプテスト神学校校長テンネーが寄稿した『我神學校の過去現在及び将来』に見るように「曠野（あれの）にさまよふ」如き時代であったと言う。即ち、校地の問題で苦しみ、また教授の度々の変更があった。「校長の変更は殊に頻繁であつて、平均すれば、丁度毎年一回宛（つ）となる」と報じている。この学校は本科だけで、東京学院高等部が予科とされていたが、明治学院や早稲田大学の予科もそれに準じて取り扱われたこともあったが、3年間の専門学校教育を受けた者が本科で学んだので程度の高い教育を施し、多くの優れた人材を育成した。

この学校に関係した宣教師で注目すべき宣教師はテンネー、グレセット、ホルトム、ワインドである。ワインドの他の3名は関東学院でも活躍するので、其処で紹介することにしてここではワインド William Wynd のみを紹介する。彼は1890年代の初め頃スコットランドから来日し神戸に住まっていた。1892年5月に按手礼を受け大阪在住の宣教師となり大阪拠点を開設し、大阪宣教に力を尽くし大きな貢献をした。後にミッション主事として東京で活動した時の日本バプテスト神学校で実践神学を担当し学生を指導した。1932年に隠退し祖国スコットランドに戻り、約10年後に亡くなるが、その間に70年に及ぶ北部バプテストの日本での活動の記録を残した。それを基に在日アメリカン・バプテストの宣教師達が1941年と1942年の悲劇的な時代の状況を加筆した合作作品を*Seventy Years in Japan* A SAGA OF NORTHERN BAPTISTSとして出版した。これは北部バプテストが日本宣教を開始した後現在至るまでの唯一の英文のバプテスト派の日本宣教の歴史である。また日本語で記述されたバプテスト史も高橋楯雄『日本バプテスト史略　上』1923、『日本バプテスト史略　下』1928しかなく非常に貴重な著書である。本文279ページ、写真も豊富で、北



部バプテスト派の北海道から沖縄、瀬戸内海の伝道、日本の主要都市及び農村伝道の記録、学校やキリスト教社会施設等の諸活動を網羅した記述である。

Ⅳ. 中学関東学院

*Report 1917*は、「最も過激な再調整が東京学院に対して断行された。グレセット東京学院院長の日本の少年達に対する教育活動はアメリカ外国伝道協会のフランクリン、アンダーソン両博士の来訪によって大きな衝撃をうけた。その直接的な結果として東京学院は閉鎖することを決意した。東京には4つクリスチャン・スクールの他多くの学校が有るので、男子クリスチャン・スクールのない横浜に新しい中学校として再開する為である。我々はその新しい施設を強力な人材及び施設の整った中学校にし、また出来れば高等商業学校を併設したい。横浜市と神奈川県当局も一緒になってクリスチャンが経営する学校の出現を歓迎している。クリスチャンの知事も強い関心を寄せている。」と記している。

1917年11月23日に中学関東学院の最初の理事会が開かれ設立の要旨が明らかにされた。創立者をテンネー、院長を坂田祐、会計をグレセットとする事などが決められた。注目すべき事は日本人が院長に抜擢されたことである。学校の経営の責任はミッションが持ち、教育は日本人に委ねるというのである。宣教師は主導するのでなく、協力するという姿勢に変わった事である。なお校名を当初予定していた関東学院中学でなく中学関東学院としたのは「公認の学校では宗教上の儀式、教育を行う事が出来ない」とする文部省訓令12号に対抗したものでキリスト教主義学校設立の意図を明確にしたものである。

MABIE MEMORIAL SCHOOL が関東学院の英文名称である。

メービー Henry Clay Mabie は1847年に生まれた。シカゴ大学、モーガンパーク神学校に学び、卒業後21年間牧師として活動した後1890年バプテスト外国伝道協会の主事に選任され1918年に召天した。ミッションは中学関東学院の土地購入と建設に必要な資金を得る為に学院を彼の記念校とする事にし、次の様な趣旨で募金した。

「 1) 日本はアジアの運命を左右する。
2) キリスト教的な日本は、キリスト教的なアジアを意味し、結果として東洋と西洋との間に永久的な平和をつくりだす。
3) 海運上の強国である日本の商業界及び産業界にとりいれられたキリスト教の精神は、国際親善にはかりしれない程おおきな貢献をするだろう。
4) 横浜にこの様な施設の必要なことは、どれ程強調しても強調しすぎることはない。
5) 日本において、バプテスト教会の活動を長期に亘って発展させるためには、適切な教育事業が必要である。
6) 日本の成人をキリスト教化することは、世界同胞の精神の実現に著しく役立つ。これは、日本及びヨーロッパにたいする我々の責務である。
7) この為に必要な経費は、最近、我々が世界平和の再建の為に支出しているものに比べ大したものではない。東洋の門戸・横浜に、国際親善、また、日本宣教の進展の為の心からの願いである。

この重要な主張が成就するために援助を請う」と訴えた。

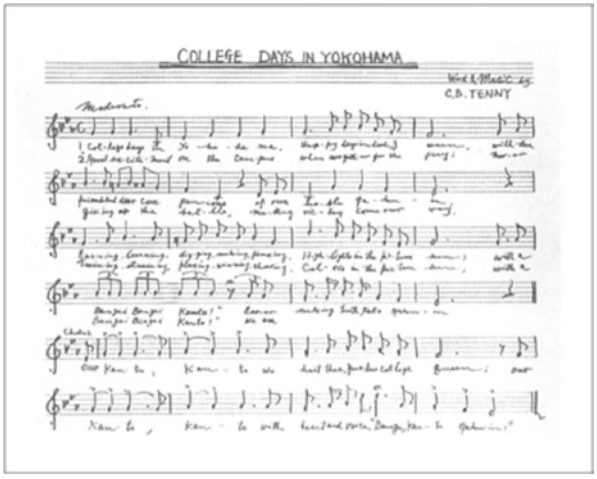
（『いんまぬえる』No.42 、1987.12 ）

この様にして得られた援助金によって1923年4月開校5年目に校舎が完成し、鉄筋コンクリートの毅然とした雄姿が霞ヶ丘に現れ、日本一の中学と誇ったのも束の間で同年9月の関東大震災で崩壊した。

テンネーは学院復興を訴える為に米国で奔走し、1927年に財団法人関東学院を組織し其の院長に就任したが、1930年病の為に辞任、翌年帰国し病気療養につとめたが1936年ロチェスターにおいて歿した。彼の神学者としての片鱗は根本主義的なバプテストの聖書主義を高等批判主義の立場に立って、1918年2月の『基督教報』で偏狭な聖書主義を排した、現代人の要請に応じてリベラルな哲学的社会的な聖書解釈を奨励している事に見られる。学者・教育者としての資質は神学校卒業時に母校に残りギリシャ語担当の教師になるように求められた事、また神学校で彼から教えられた人達の証言からも明らかである。また教育者としての姿勢は大学正門付近の両側の建物のガラスの壁面に刷り込まれた A NEW GATE AND ROADWAYによって知る事ができる。(『関東学院学報』28号参照)

経営者としての資質は日本バプテスト神学校の校長、東京学院の理事長、中学関東学院の理事長、関東学院の院長を歴任し、種々の困難な問題を解決、克服して学院を充実、発展させた実績をみて明らかである。彼は第一の源流である横浜バプテスト神学校、日本バプテスト神学校、第二の源流である東京学院、第三の源流である中学関東学院の教授、校長、理事長として関わり、最後は財団法人関東学院の院長を勤めた。彼は将に関東学院の為に神が備えられた指導者であった。彼はまた音楽を愛したことで知られているが、スポーツをも愛し学院歌College Songを残している。

A NEW GATE AND ROADWAYはテンネーの教育理念を示すもので、1929年三春台の校地に新しい正門が完成した時に記念とし記されるものであるが、関東学院の建学の精神と教育理念を示すものとして大学に新しい正門が完成した時に、ガラスデザインとして復活し、正門の両側の建物の壁面を飾っている。その一部を『関東学院学報』No. 28号に掲載された訳文で紹介する。



「～若者達は大学に学問を習得するために来ます。彼らは知識を獲得することを望んでいます。そのような学生の多くは単に『情報を収集して』いるだけであって『思考する』ということは学んではいません。一般の学生は皆、せっかく享受し得た精神的糧を消化することができないでいるのです。悲しいかな、そのような多くの学生は再生される『レーコード盤』と大差がありません。彼らはその概念を真に理解することなく、単に言葉だけを繰り返しているだけなのです。私たち自身が日々学び、思慮深くならない限り、私たちに課せられた、関東学院の使命を果たすことはできないのです。

また、自己の中だけで完結してしまう学問というものはむなしいものといえます。本当の学問とは他者のためにあるもの、人々を祝福するためのものなのです。私たちが大学に入学するのは、自分に必要なものを得るためだけではありません。世の中に広く奉仕する準備を整えるためなのです。

まさに大学の門から『出る』ということは、大学の門に『入る』ことと同じように重大なことなのです。どれほど優れた学者を養成したとしても、彼らがその才能を身勝手に活用する限り、私たちの誇りとはなりえません。入学時の原点の志である奉仕の精神が欠けているからです。だからこそ、我々はここ関東学院において『奉仕されるのではなく奉仕する。そして他者のために人生を捧げる。』そのような人物を模範とするべきなのです。」

V. 関東学院

1927年財団法人関東学院が組織され、東京学院は合併してその組織の中に入り、高等部(社会事業科、商科)、神学部となった。院長はC. B.テンネー、副院長は千葉勇五郎、高等部長には坂田祐が就任し、神学部長はテンネーが兼任した。中学関東学院も財団法人の組織に入り、中学部と改称し、部長は坂田祐が兼任した。

1928年屋内体操場、1929年本校舎一棟、1930年本校舎一翼等の建設が進み施設が充実し順調に発展した。1928年キリスト教の社会的実践活動の一環として、渡部一高、友井楨、コベルなどが関東学院セツルメント活動を開始した。また同年9月に満州事変が勃発し、その後所謂15年戦争時代に突入し、次第に思想統制が強まりキリスト主義学校も大きな制約を受ける事になる。

1932年夏、御殿場東山荘で開催されたSCM・学生キリスト教社会運動に参加した神学生、社会事業部(神学部の予科を兼ねた)の学生たちは、その運動が左翼的なものとの

嫌疑で検挙された。その影響をうけて1933年には神学部の学生は青山学院、社会事業部の学生は明治学院で授業を受けることになり、1935年には社会事業部が廃止、1936年には神学部が廃止され学院は中学部と高等商業部のみとなった。

戦局が膠着化して行く中1937年には日支事変に突入し、1938年には国家総動員法が発令され国防目的の為にあらゆるものが統制されるようになった。1939年には宗教をも統制する為に宗教団体法が成立した。同法による法的保護は天皇に忠実であり、国家に奉仕する限り認められた。キリスト教界においてそれを見ると、各教派は自ら告白し主張する信仰の独自性を捨てて、一元化され政府の統制に服さなければ存立が許されなくなった。更に外国宣教団からの人的支援を受けず、また経済的支援からも自給独立する事を求められ、事実上外国宣教団と絶縁するよう迫られたのである。

先に南北バプテスト教団が合併して形成された日本バプテスト教団は1940年10月に自給独立を宣言し、翌年3月限りバプテスト海外伝道協会からの支援を辞退する決議をした。それを受けてアメリカン・バプテスト宣教団は同年11月に「宣教団の申し合わせ」を発表し、日本側の辞退申し入れを受け入れたので、アメリカのバプテスト教団からの人的、物的支援が無くなった。1941年3月にホルトム、フィッシャーらがミッションの勧告に従って帰国した。同年12月には太平洋戦争が勃発した。

ホルトムDaniel Clarence Holtom は1884年にミシガン州ジャクソンに生まれ、1907年カラマズー大学、1910年ニュートン神学校を卒業し、同年10月東京学院の教師になる予定で来日した。地方教会からの要請で暫く水戸地区担当の宣教師として活動した後、1914年7月東京に移転し、東京学院院長に就任し、日本バプテスト神学校で哲学と聖書釈義を教えた。彼は比較的短期間に日本語を習得し日本の古い文献である古事記、日本書紀、万葉集、更に日本の思想の根底にある神道に関心を持った。道端の社は彼の興味の的であり、古本屋の前を通り過ぎる事が出来なかったと言われている。同僚の宣教師達は彼が1922年に The Political Philosophy of Modern Shintoを出版するまで、彼が日本の宗教家達と交流している事や、神社を歴訪している事を知らなかった。

彼は東京学院、日本バプテスト神学校で教え、関東学院神学部では宗教学、歴史を教え、同学部が廃部になる頃には神学部長を務めた。戦時中アメリカに於いて戦後の日本の処理について多様な論義があったのに対して、彼は自分の意見を『戦後世界の神道』と言う論文にして*Far Eastern Survey* Feb. 14 1945 に寄稿した。その中で彼は「天皇は日本国民の統合の中心であるため、その処遇の如何によっては、戦後処理の困難を増大する可能性が大きい。それ故、軍国主義が破壊され、その指導者が処罰されたなら天皇神聖の迷信は外部的圧力によらず、内部的圧力によって崩壊するのを待つべきである。」と主張した。戦後、日本を占領した米軍は彼を日本に招聘したが、彼の健康状態はそれに応じる事を許さなかった。(『いんまぬえる』1977.1. No.10)

フィッシャー Royal Haigh Fisherの父Charles Henry Day Fisher はベンネット、ポートと横浜バプテスト神学校の創設に関わったことは先に述べた。彼の最後の任地は横浜地区の宣教師であったが、休暇で不在の学院宣教師に代わって

中学関東学院で教えたこともあった。彼の息子Haigh は二代目宣教師で関東学院の財務理事として学院を支えると共に英語教師として働いた。また毎週土曜日の夕べは自宅でバイブル・クラスを開き教員や生徒に大きな感化を与えた。日本育ちの彼は日本語に堪能で、教室で生徒が誤った日本語を使うと、「君、そんな日本語はないよ」と言って訂正したという逸話がのこされている。戦時中は強制収容所 relocation camp に収容されている在米日本人や日系アメリカ人の慰問に努めた。彼等親子の地道な活動に典型的な宣教師の働きを見る事が出来る。

コベル James Howard Covell は1920年に前年開校した中学関東学院の英語教師として来日し、1927年に組織を変更した関東学院では高等部でも英会話の授業を担当した。彼は慣例的な授業に満足せず斬新な教育法を採用して生徒達に基礎的英語に馴染ませた。またLincoln Society を組織して国際感覚を身に着けさせ、在留外国人との親睦を図った。

自宅にはイザヤ書2：4の預言を題材にした「鎗を打ち直して鎌としている」絵を掲げ、手紙にはFriendship not Battleshipというスタンプを押すなどして常に平和主義を強調した。またキリスト教の社会的実践活動にも関心を持ち、渡部、友井両教授と共に1928年に関東学院セツルメントを開設し、その宗教活動部門を担当した。しかし軍国主義的風潮が主流をなす時代は彼等の社会主義的また平和主義的活動を危険思想として排斥され、県の外事課は院長にこれ等の教授の解任を迫った。（『坂田日記』参照）1939年2月7日坂田院長は不本意ながらその指示に従った。コベルはしばらく東京地区宣教師として働いたが、同年6月には新しい活動の場所をフィリッピンに求め、パナイ島イロイロのCentral Philippine Collegeの宣教師に就任した。彼等夫妻は此処でも日本にいた時と同様その熱心な活動と奉仕に依って人々から慕われた。

しかし1941年12月に太平洋戦争が勃発し、フィリッピンのマニラを攻略した日本軍は翌年4月にはパナイ島にも上陸した。大学校に働く宣教師達は山奥に避難し、其の避難所をHopevaleと名付け平和が戻る時を待った。然し1943年12月20日にゲリラ狩りをする日本軍に発見され、11名の宣教師と3名の子供、その他の避難者が処刑された。関東学院では宣教師として信仰と平和主義を教えたコベル夫妻もそこで殉教死を遂げた。

グレセット J. Fullerton Gressittは1883年7月にメーリランド州ボルティモアに生まれた。1906年ジョンズ・ホプキンス大学を卒業し、1907年10月宣教師として東京に着任した。1908年1月より横浜バプテスト神学校で英語と心理学を教えた。1909年より京都で宣教活動に従事した後、1912年より18年12月まで 東京学院院長を務めた。その間一時休暇帰国中にジョンズ・ホプキンス大学より教育学修士の学位を取得した。中学関東学院が開学した後は会計担当の理事を務め乍ら英語と聖書を教えた。彼は学院の屋上に当時の日本では珍しい程立派な天体望遠鏡を備え付け、夜遅くまで観察し、同校の生徒達に天文学の智識を授け、星空の神秘に触れさせた。

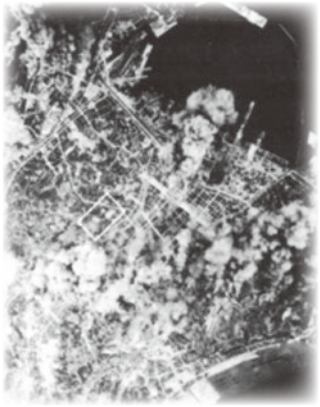
1925年6月病気の為に帰国した。病気恢復後もそのままカリフォルニア州にとどまり、Chabot天文台とMiles Collegeの教授として働いた。従ってミッションの記録では1926年で宣教師を辞任した事になっており、1929年7月の来日後の記録は欠けているが、関東学院の教師をしていたことは確かである。

ミッションの勧告に従って夫人を1941年春に帰国させたが彼自身は残留して12月に太平洋戦争開戦の日を迎えた。其の後1942年9月に敵性外国人として制約を受けるようになるまで、戦時下の学院で授業を続けた。開戦の日からその日までの彼の祈りの記録が1970年に『愛と祈り』として出版された。開戦の日の祈りの一節に「おお、神様よ、日本帝國をあやまつて取扱つてしまつたという恥ずべき行為の故に我々を許したまえ。我等の神よ、戦争の勃発の故に涙している、此処に住むすべての友に慰めを与えたまえ。神よ、我々ひとりひとりを助けたまえ。祖国の過失をやめさせる為に、私を何かの道に用いたまえ。」とある。

敗戦後は賀川豊彦を助けて度々占領軍司令官MacArthurに戦後処理について陳情する為に出掛けたが戦時中の栄養不足による障害で衰弱し帰国することになり、日本に駐留中の海軍大尉の息子の世話で厚木の空港から帰国する直前に倒れ、賀川宅において肺炎で天に召された。

学院社会事業部の卒業生の磯鐐太郎は『バプテストの忘れ得ぬ人々』という冊子に彼について記述しているが、その結びの所に「11月1日に飯田橋の富士見町教会で葬儀が執行された。司会者はYMCAの総主事の斎藤惣一、略歴朗読は坂田祐、弔辞は賀川豊彦であった。参列者は印半纏のいれ墨男、僧衣姿、チョンマゲの相撲取り、白衣の紋付の神官、労働服、モンペ姿、いろとりどりの姿だ。(要約)」云々と、書き残している。多彩な参列者の姿は先生の宗教や階級の差別をこえた幅広い活動であった事を示唆している。この記述や賀川との親しい交わりがあった事は先生が関東学院での働きの外に社会事業活動をされ多くの人から尊敬されていた事が推測できる。

Ⅵ. 戦後の関東学院



1945年5月29日の横浜大空襲によって関東学院の建物・設備の3/4が焼失・破壊された。同年12月に六浦の旧海軍航空技術工員養成所の土地、施設の使用が許され関東学院工業専門学校などが六浦に移転した。1949年に新制大学として関東学院大学が設立されたが、校地・施設ともに大蔵省の所属で一時使用を許可されているものであった。それ故それを政府より払い下を受けて関東学院の所有とし、校舎・設備を完備することが全学の願望であった。その様な時、1950年にアメリカン・バプテストの信徒達の間で日本復興を援助する為の募金運動JAPAN OPPORTUNITYが始まった。1947年に来日し49年に関東学院理事長に就任していたアキスリングWilliam Axlingは彼の本来の仕事を差し置いて急遽米国に戻りその運動を推進した。募金された金額の総額$261,189.22の内の$110,000.00 、即ち募金の42%が関東学院の校地、その他の経費として関東学院に捧げられた。即ち、其れは日本の将来の指導者を養成する機関としての学院大学に対する期待の大きさと、募金の為に尽した学院理事長アキスリングと宣教師主事ヒンチマンBill Hinchmanの尽力によるものである。

アキスリングは1901年Rochester神学校を卒業し、同年宣教師として来日し、盛岡に定住して活動していたが病気の為に1906年に帰国、1908年に再来日した。其のころバプテスト派も時代の要請をうけて伝道方式が変わり、直接的な福音伝道に限定せずInstitutional Church 即ち、社会公共事業、教育事業を重視する様になった。アキスリングは東京中央会館(後に三崎町会館と改称)の責任者となった。其の建物が1923年関東大震災で輪郭を残して焼失した時、応急修理して被災者を収容し、また託児所、診療所を開設して救護活動に当たった。また1931年満州事変勃発後の経済的不況の時代に三崎会館は厳冬時に延べ6,000人を無料宿泊させ、15,000食を無料で供給するなど社会事業で大きな貢献をした。また彼は1941年3月には日本基督教連盟の親善使節の一員として渡米し、戦争防止のために遊説した。戦後1946年73歳の時、老齢にも拘らず特例の宣教師として来日し、日本復興の為に力を尽くし、1955年に隠退帰国した。帰国する前に *Japan at the Midcentury* を日本で刊行し、その印税を関東学院チャペル建設のために捧げた。日本政府は彼の功績に報い勲二等に叙し、瑞宝章を贈呈した。東京都は名誉都民として鳩杖を贈ってその功をねぎらった。

ジェニンス Raymond P. Jenningsはミズリー州セントルイスに生まれた。イエール大学神学大学院を卒業し、1950年2月に関東学院大学の宣教師として来日し宗教活動に於いて目覚ましい働きをした。その素地は若い時代の経験の中に見られる。即ち彼はウィリアム・ジュウエル・カレジの3年生の時、第三バプテスト教会から説教免許状を与えられ、その後間もなく他の教会から牧師として招聘された。按手礼を受けたのは 20歳

の時であった。彼の尊敬する牧師 Dr. C. Oscar Johnson はパウロがその愛弟子を信頼して「私のテモテ」と呼んだ様に彼を呼んだ。彼は生来の説教家であった。来日後1年の1951年に神学部の前身となるキリスト教研究所が開所され彼は其の教師に就任した。1954年には院長、学長等学院の要職にある者、クリスチャンの教員、クリスチャンの門番樋口爺さんまで10名程の証言を夫々小冊子に編集して『唯一回のあかし』というシリーズを刊行し学内に配付した。1957年12月に『告知板』を創刊し、YMCAの学生に編集発行させた。告知板はその後大学チャプレン会が年に6回発行しているが、近く385号を発行することになる。彼はまた宗教月間を儲けて、その期間中は学内外のクリスチャンの指導者による講演会を開き啓蒙的な宗教活動を実施した。また教職員の為に夏季修養会を実施するなど活発な活動展開したが、戦後のキリスト教ブームと言う時代的背景もあり、また明るい社交的なお人柄、内村鑑三に傾倒するという日本好きな態度が教職員、学生に受け入れられた。彼の指導する「交わりの会」も盛況であったが、1959年夏突然辞任帰国した。

ヒンチマン Bill Hinchmanは1921年12月ウエストヴァジニア州ローガン市の郊外に生れた。ケンタッキー州のベレア大学を卒業した。彼はこの学校の校章に刻まれていた聖句「神は、一人の人から凡ての民族を造りだされた」（使徒伝17：26）を信奉し、生涯をかけて其の実践に努めた。大学在学中に徴兵委員会から出頭通知を受けた時「国を愛する者として国の為には何でもするが、人を殺す事は出来ない」と、良心的徴兵拒否を表明し、其れが認められた。大学2 年生の時ある教会から招聘され按手礼を受け牧師としての活動を始めた。前記ジェニンスの場合と同様これは非情に珍しいケースで彼ら有能な青年宣教者であった事を示しているが、その様な有望な青年宣教師が日本の精神的復興の為に派遣されたのである。

彼は1949年1月に来日し三崎町教会、深川教会、潮来教会等の伝道に協力した。戦後まもなく日本の教会復興を支援する為に派遣された宣教師達は戦前の日本で活動した経験のある老練の宣教師フートJohn A. Footeやアキスリング等であったが、やがて若い宣教師が派遣されるようになり、その最初の頃に派遣されたのがヒンチマンであった。彼は宣教師主事に任命され、同時に関東学院の理事にもなり、六浦校地買収の資金獲得の為に大きな貢献をした。またキリスト教研究所が開設された時には旧約聖書を教えた。1963年～81年は阪神間での宣教活動に従事し関西学院大学でも教鞭をとり学生たちに信頼され慕われた。1988年より92 年まで関東学院の院長を務めた。学院各校の入学式や卒業式の式辞、学院クリスマスやチャペルでの説教は教職員、父兄、学生、生徒、児童に大きな感動を与えた。それ等の話は説教集『神は愛なり』とし残されている。在任中の87年に大学チャペルが建設されたが、その入り口の門に彼の愛唱句「神は愛なり」がギリシャ語で浮き彫りに記されている。

結び

International Ministries of American Baptist Churches（アメリカ北部バプテスト教団の外国宣教部）は日本の経済的状況、日本のバプテスト諸教会や教育施設などの宣教活動が精神、経済の両面において既に自立し、将来の発展が可能であるとして、2014年5月Miss Roberta Stephensの任期満了を以て宣教師の派遣を終了した。其れは1883年から2014年の140年の長きに及んだ。その間太平洋戦争時代に一時中断した事は既に述べた通りである。

戦後暫くの間J3 と呼ばれる正規の宣教師の資格を持たない若者が3年間学院関係の諸学校に奉仕した事もあった。また短大には婦人の短期教育宣教師が赴任されその中にはMrs. Rene Sweezeyの様に自宅に於いて多くの男女学生を指導し、また学校教会の活動を援けた元牧師夫人のような宣教師もいた。ここに名をあげて紹介することのできなかった宣教師こそ、宣教師らしい宣教師、即ち己の名誉や利を求めず、主の召に応えて宣教にその生涯を捧げられた人達である。校訓に示されている「奉仕」の生涯を実践された先達である。勿論その背後にある組織や教会、信徒への感謝を忘れることは出来ない。

なお現在冨田茂美博士が在任中であるが、これは従来の宣教師とは違った新しい制度による宣教師である。

参考文献

William Wynd, *Seventy Years in Japan.* A SAGA OF NORTHERN BAPTISTS. Privately Printed
American Baptist Missionary Magazine
GLEANINGS, FROM THE AMERICAN BAPTIST MISSIONS IN JAPAN
『基督教報』教報社
JAPAN BAPTIST 日本バプテスト同盟 No.263, 2014.2
チャプレン会『いんまぬえる』No.8,1976 No.10,1977 No.13, 1978 No42, 1987 関東学院
『関東学院学報』No.28,2004 関東学院
日本バプテスト130年史編集委員会『日本バプテスト史年表』日本バプテスト同盟 2013
同上 史年表『資料編』2014
柳生直行『関東学院百年史』関東学院 1984
枝光泉『宣教の先駆者たち』ヨルダン社 2001
Shigeki Oshita 、MEDITATION AND GRATTITUDE『半ぱはゼロ』岳友会出版部 昭和59年
坂田 祐『恩寵の生涯』待晨堂 昭和 41年
J.F. グレセット『愛と祈り』関東学院 昭和45年
丹野真人『バプテストの忘れえぬ人々』日本バプテスト同盟 2011
大島良雄『灯火をかかげて』ヨルダン社 2002
大島良雄『バプテストの横浜地区伝道』ダビデ社 2007
大島良雄『バプテストの東京地区伝道』ダビデ社 2009

掲載写真　※番号は各ページ掲載順

P4①　Jonathan Goble（1827 -1896）
P4②　Nathan Brown（1807-1886）博士肖像と横浜バプテスト教会設立当時の教会簿
P4③　横浜バプテスト神学校全景（1894年当時）
P5①　Albert Arnold Bennett（1849-1909）
P5②　Charles Henry Day Fisher（1848-1920）
P5③　Charles Kendall Harrington（1858-1920）
P5④　ベンネットが編集した『基督教讃美歌』1896年刊と彼が作詞し、夫人が作曲した『しずけき夕べの』
P5⑤　John Lincoln Dearing（1858-1916）
P6①　Wilbur Brown Parshley（1859-1930）
P6②　東京中学院築地校舎（二棟あった）
P6③　渡瀬寅次郎（1859-1926）
P6④　Ernest Wilson Clement（1860-1941）
P7①　Henry Topping（1857-1942）
P7②　東京学院本館
P7③　Samuel White Duncan（1838-1898）
P8①　日本バプテスト神学校第4回卒業式式次第
P8②　日本バプテスト神学校第4回卒業式記念写真
P9①　中学関東学院の寄宿舎（校舎が完成するまで一時教室として使用した）
P9②　関東学院理事（前列左から、渡部元、テンネー、植山直樹、高橋楯雄。後列左から、グレセット、坂田祐、ホルトム）
P9③　Henry Clay Mabie（1847-1918）
P9④　1920年第一期工事が終わった校舎（中央に塔が予定されていた）
P9⑤　関東大震災1923（大正12）年9月1日の時に倒壊した学院本館
P10①　Charles Buckley Tenny（1871-1936）
P10②　テンネー作詞作曲カレッジソング
P11①　来日当時のコベルと坂田祐
P11②　関東学院セツルメント指導者友井槇（こずえ）先生
P11③　関東学院セツルメント会館起工式（渡部一高、千葉勇五郎の姿あり）
P11④　Daniel Clarence Holtom（1884-1962）と Mary Grace Price夫人（1886-1965）
P12①　James Howard Covell（1896-1943）
P12②　コベルの家族
P12③　James Fullerton Gressitt（1883-1945）
P13①　横浜大空襲（米空軍図書館提供）
P13②　横浜大空襲黄金町駅付近の惨状
P13③　William Axling（1873-1963）
P13④　アキスリング夫妻
P13⑤　Raymond P. Jennings（1924-2006）
P14①　Bill Lee Hinchman（1921-2001）

ベンネット博士

Albert Arnold Bennett
(1849-1909)

元大学教授　元学院宗教主任
佐々木　敏郎（としお）

生い立ち・学生時代

A.A.ベンネット博士は1849年4月16日、北米フィラデルフィヤに生れた。博士の母はフランスの新教徒ユグノー派（カルヴァン派プロテスタントの異名）の人であったが、7才の時に永眠した。彼女は夜眠る時、就床の祈禱の結びには必ず「福音を異国に送らせ給え」と子供たちに教えて祈ったという。父Edward A. Bennettはフィラデルフィヤの第5バプテスト教会の執事であり、日曜学校の校長でもあった。多くの人々から尊敬をうけまた子供たちからも愛された。ベンネット博士はこのような敬虔な両親のもとで成長し、13才の時バプテスマを受けて教会に加わった。若くして日曜学校を教え、病者や老人を慰め、集会の司会などをして教会に奉仕した。18才の時父に死別し、翌年故郷を離れ、プロヴィデンスのブラウン大学に入学、1872年マスター・オブ・アーツの学位を受け優等で卒業した。この大学は幾多の著名な宣教師を輩出したことで有名であり、伝道精神の旺んな学校である。博士の同級生には支那の有名な宣教師であったDr. Wm. AshmoreやRev. J. H. Arthur（1876年東京で最初、日本で2番目のバプテスト教会の設立者。文部大臣森有礼氏と親交があり、駿台英和女学校の前身を開いた。1875（明治8）年11月6日、東京におけるバプテスト最初の婦人信者、内田はま姉に水道橋とお茶の水の間の神田川で浸礼を施した。この光景を見た群衆は西洋人と日本娘とが情死するのだと評したという）等があった。

特にベンネット博士が大学において日常起臥した室は、バプテストの生んだ近代伝道界の英雄、ビルマ伝道の開拓者、アメリカの海外伝道の発展に大きな影響を与えた、アドナイラム・ジャドソンAdoniram Judson（1788-1850）が曽つて占めた室であった。これはまさに不思議な神の摂理というべきであろう。こうしたこともあってか、彼がシカゴ神学校の学窓におった25才の誕生日に、断食と祈禱と数人の友人達の祈りのうちに日本伝道のために献身の志を定めた。神学校では、外国伝道会社の主事となったDr. H. C. Mabie（関東学院は、このメービー氏記念学校とよばれている）、ニュートン神学校長となったPres. N. E. Wood, Rev. C. H. D. Fisher（1983（明治16）年3月来日、1920年横浜で永眠するまで37年間日本の開拓宣教師として働いた）等とも同級生であった。

牧会

1875年12月、博士は按手礼を受け、数年後に宣教師として赴任する意向を明かにして、マサチューセッツ州ホリストンのバプテスト教会牧師に迎えられた。4年間牧会に従事したが、その教会の一人の信者は「氏のように牧師として我々の心をみたした者は他になく、又友として常に同情深く且忠実であった。氏がホリストンを去った後、未だ私の理想的牧師を見なかった。愛する古いホリストン教会における氏の説教の感化は、常に私を離れなかった」と述べている。博士がホリストンを去る時に、教会は感謝のしるしに美しく彫刻した金時計を贈った。それから一週間後、1879年9月30日、コネチカット州、ミドルタウンのバプテスト教会の牧師B.W.バロウズ氏の長女メラ・イサベル・バロウズMela Isabel Berrowsと結婚し、日本に向って出発し、1879（明治12）年12月7日横浜に着いた。

神学校の設立

ベンネット博士が来日した時、日本には既に7年前に到着した老功の先輩、ネーザン・ブラウン博士Nathern Brown（1807-86）がいた。ブラウンはインドのアッサム地方に開拓伝道をなし、アッサム語新約聖書を完成（1848年）したが病のためやむなく帰米、奴隷廃止運動につくし、65才の老令にもかかわらず再び日本伝道に燃えて1873（明治6）年2月7日ゴーブル夫妻とともに横浜に到着した。その翌月3月2日（日曜日）に日本最初のバプテスト教会、すなわち横浜第一浸礼教会を設立した。（本学の時田信夫教授が同教会の名誉牧師、神学部大竹庸悦牧師が去る5月8日按手礼を受け正牧師に招かれた）

ブラウン博士は聖書の共同翻訳委員に推されたが、〈洗礼〉を〈浸礼、沈め〉とすべしと主張していれられず、委員を辞退し1879（明治12）年8月新約聖書和訳を完成した。これは日本における最初の新約聖書の完訳であって、まさに画期的な偉業である。当時ブラウン博士は聖書和訳と讃美歌の編集、その他の伝道用の雑書の公刊に多忙を極めていた。一日8時間以上も翻訳に没頭し、指がしびれて、ペンが

とれなくなるまで働いた。この72才の老ブラウン博士を援けて30才のベンネット博士夫妻が働いたのである。かつてブラウン博士が、インドのビルマで、もう高令のジャドソンの下にあったように、ベンネット博士はブラウンを仰いだことであろう。ついにブラウン博士は明治19年の元日の夜、地上79年の生涯を了えて召された。横浜外人墓地のブラウン博士の墓標には"God bless the Japanese"としるしてある。ベンネット博士は多忙な伝道活動を通して日本人教役者の養成を痛感した。氏の自宅には毎週4人の者が集って教を受け、ついには毎日集るようになり、聖書研究と神学と説教学とを教えらえた。「神学校設立前に教を受けた者は、川勝鉄弥、鈴木任、同重威、池田清道及び他一人の5氏であった。明治17(1884)年にブラウン博士の宅に京浜の宣教師会があって、ベンネット氏の提議にて神学校を設立することが可決せられ、同年10月6日月曜日に学校は開かれた。ブラウン博士とベンネット氏の家の丁度下で、後にあった平家の西洋館があいて居ったので、之を校舎として用いた。教師はベンネット氏(聖書釈義、説教学)、ポート氏(教会史)、フイシャ氏(神学)で、フイシャ氏は東京から通うて来た。校長はベンネット氏であった。ポート氏は東北の伝道を、フイシャ氏は東京の伝道を受持っていた。

最初の生徒は尾作昇平(当時は織部と言うた)、中鉢七三郎、池田清道、中島某諸氏にして県庁の衛生課に勤務していた市川徴氏の宅に宿って学校に通っていた。此の時代は伝道者の少い時で、又非常に必要な時であったから、第一学期は4ヵ月で、学生は此の4ヵ月学校で学んで、8ヵ月任地に往って伝道した。而して第二学期には働いていた人々が学校に帰って来て4ヵ月学んだ。明治20年頃まで此の方法を用いた。17年と18年の学年には、11人の生徒が居ったと思う。第一学期に6名、第二学期に5名居ったと思う。」(高橋楯雄編『日本バプテスト史略　上』115頁)と記録されている。

ベンネット博士の活動

ベンネット博士の働きは多忙を極めた。初代のバプテスト神学校校長の他に、横浜バプテスト教会の牧師、ミッションの会計、Gleanings誌と讃美歌の編集者、YMCAの書記として活動した。その他病院と監獄と海員伝道等にも労を惜しまなかったが、夫人の筆になる伝記にはその超人的な活動が記されている。博士のモットーは"Do the duty that lies nearest thee"「汝の最も身近にある義務を果せ」であり、"When in doubt between two courses, duty is generally to be found on the other side from inclination"という言葉であったという。

彼は北は北海道から南は沖縄、台湾まで旅行し、明治29年の三陸の大津波には災害者の救済に尽力し政府から金杯を贈られた。1900年母校ブラウン大学は氏に博士号を贈呈した。1902年の帰国に際しては、コルゲイト・ロチェスター 神学校で「宣教学(ミッション)」を教えThe Nestor of Baptist Missionaries of Japanと仰がれた。讃美歌213番の「宣教者」「みどりの牧場に」は藤本伝吉氏がベンネット博士を追懐したものである。博士自身も明治19年「基督教讃美歌」を公にしたが、これはバプテスト教会最初の大歌集で237編を収めている。

4人の息子と3人の息女に恵まれ9月30日の結婚30年記念もすみ神学校創立25年の祝賀会の終りには祝福の祈禱を与えられたが、翌日1909(明治42)年10月12日午前11時、60才でイエスのみ許に召された。ベンネットという名前はラテン語のBenedictio(祝禱)から由来するというが、その名にふさわしい最後であった。その葬儀には博士の作詞、夫人の作曲になる讃美歌48番「しずけきゆうべのしらべによせて」を会衆が日本語で歌った。横浜の外人共同墓地にある博士の墓標に"He Lived to Serve"としるされているが、この言葉こそベンネット博士の生涯をもっともよく示すものと言えるであろう。

『告知板』No.64より転載

【画像】　提供：学院史資料室(番号は掲載順)
① ベンネット編集のキリスト教伝道パンフレット(人力車夫を対象としたもの)
② ベンネットとその家族(1904年)

アーネスト・ウィルソン・クレメント博士
－関東学院の前身校　東京学院設立者・学院長－

Ernest Wilson Clement
（1860-1941）

元大学教授　元学院宗教主任
高野　進

天と地を支配しておられる方が　語られた /
**　　遥かな かなたから聞こえる 調べのように /**
貫の木を砕け と / 門を開けよ と 命じられる /
真理が 妨げられることなく 入り /
**　　魂が 眠りから覚めるように と /**
暗闇の真中にも / 新しい日が 始まろうとしている /

古い東京 栄華の座 / 日本の中心が 動き /
今や「世の初めからの救いの物語」を聞く /
**　　その耳を そむけることはない /**
平家建の集会所には 人々が満ち /
**　　すべての人々が 同じように /**
目を天に向けてて /
**　　広大な空を射通すことを 切に求めている　/**
……
地上のすべての恵みの /
**　　送り主なる方に 捧げる祈りが /**
遥かなる地のすべての川を / さかのぼる /
喜びの福音の調べにあわせて /
**　　多くの人たちの声が 高まる /**
罪のもたらした悲しみが /
**　　丘　平地　谷から消え去る /**
－　ジェッスィ・クレメント　－

その生い立ち

この詩は、アーネスト・ウィルソン・クレメントの父親、ジェッスィ・クレメントが1876年に作詩したものの一部である。アーネストは自分の著書『近代日本のキリスト教』（Christianity in Modern Japan）の冒頭にこの部分を掲載した。この詩に描かれているヴィジョンが、いまや実現している、と彼は言いたかったのであろう。この詩が書かれた3年前に、キリスト教禁制の高札が撤去された。実はこの詩が作られた1876年には、札幌農学校が創立された。高名なW・クラーク博士の感化のもとに、やがて青年キリスト者の群れ「札幌バンド」が生まれた。また熊本では、アメリカ陸軍大尉、L・L・ジェーンズの感化を受けて、熊本洋学校の学生たち35名が花岡山に登り、「奉教趣意書」に署名した。この若い人々は「熊本バンド」と呼ばれる。かれらはやがて京都に移り、同志社英学校に編入した。この時期に、横浜では、J・C・ヘボンらが新約聖書の翻訳に全力を尽くしていた。そして10年後には、この作詩者の息子も、このヴィジョンの実現のために、日本にやって来た。

E・W・クレメントは1860年にアイオワ州ドビューク市に生まれた。ここはアメリカ合衆国のちょうど中部に位置し、世界最大の穀倉地帯に属する。ドビューク市はアイオワ州の北東、ウィスコンシンとイリノイの州境に接したところにある。アイオワ州では最も古い美しい町で、食肉加工、農業、木工製品、機械などの産業が盛んである。

父親のジェッスィ・クレメントは、この町の日刊紙Daily Timesの創業者であり、主筆でもあった。篤信なキリスト教徒であり、教会執事として奉仕した。母親ルッセッタ・H・ブラッドも教会活動や慈善事業に積極的で、国内だけでなく、海外の宣教にも強い関心を持っていた。彼女には教師の経験がある。彼女自身もやがて息子とともに日本に来て、東京学院の教育や宣教活動に従事し、今は青山外人墓地に眠る。

来日まで

博士は旧シカゴ大学に学んだ。1880年の卒業式にあたり、告別演説をするという名誉ある特権を与えられた。また卒業論文は優秀賞を獲得している。成績優秀な学生と卒業生で構成されるクラブ「ファイ・ベータ・カッパ」の会員であった。3年後には同大学から修士の学位を授与されている。この旧シカゴ大学はスティーブン・ダグラス上院議員から土地提供を受けて始められた。その前身は横浜バプテスト神学校初代校長、A・A・ベンネットが学んだバプテスト・ユニオン神学校である。

今日のシカゴ大学はジョン・D・ロックフェラーから贈られた基金によって再出発したものである。研究重視の大学として有名である。これらの大学はいずれも、関東学院大学と結びつきのあるアメリカ・バプテスト諸教会と深い関わりがあった。

それゆえ本学の前身校の卒業生の中には、シカゴ大学に留学した者も多い。卒業後、彼はシカゴの郵便局勤務を経て、いくつかの学校で教師の経験を積んだ。

東京中学院の設立者

1887年に招聘を受けて来日し、茨城県水戸の中学で4年間教えた。ここの校長は札幌農学校第一期生、渡瀬寅次郎であった。クレメントはここで渡瀬と出会い、生涯深い友情を持ち続けた。1895年に関東学院の前身である東京中学院が創設されるに際して、博士は麻布中学の教頭職にあった渡瀬氏を学院長として招いたほどである。東京中学院は東京築地居留地の西洋館の借家で始まった。今日の中央区明石町である。博士がどんなに親身になって生徒たちの面倒をみたかは、元関東学院長の柳生直行先生が引用した次のエピソードに的確に例証されよう(『関東学院教育の群像』56頁)。

学校開設後の2年目、1897年9月9日に大きな台風があって、校舎兼宿舎の屋根が全部吹き飛ばされてしまった。博士は生徒たちの監督と世話に没頭し、屋根のない建物の中で、夜もほとんど眠らず、片手に傘、片手にランターンを持ち、ハネを上げながら、部屋から部屋へと渡り歩き、生徒たちが雨に濡れないように注意することもしばしばであった。

柳生元学院長は博士の後ろ姿から学びとり、「キャンパスがどんなに立派になろうとも、『片手に傘、片手にランターン』というあの姿を決して見失ってはならないと思うのです」と、後に続く私たちに戒めを遺しておられる。

この学校はやがて牛込左内坂に校舎を建設して移転し、東京学院と名称を変えた。博士は、開校の準備と創立以来、17年間、この学校の設立者・学院長・教授として大きな働きをされた。博士の学校運営方針は少数精鋭主義であった。しかし日本では、多くの卒業生を出す大規模校の方が、社会的な評価が高く、影響力も大きい。しかも財政的にも、いつまでもアメリカ本国の教会からの援助を受けることはできないという課題があった。そのため、学校運営方針が転換した段階で、博士は東京学院を退いている。

1909(明治42)年　東京学院卒業式

第一高等学校英語教師

その後、博士は旧制第一高等学校(今日の東大教養学部)の英語教師に招かれ、16年間教鞭をとった。新渡戸稲造博士が同校の校長をしていた時期もこれにふくまれているが、同博士とは深い親交があった。この時期に英語研究誌である『英語青年』にも時々執筆している。クレメントはアメリカ人仲間からも「プロフェッサー」と敬愛を込めて呼ばれていた。博士が来日前にシカゴ大学予科の教授の経験があったからばかりでなく、その学殖と優れた教授能力のゆえであろう。博士は教育活動のかたわら、アメリカ領事館通訳官、アジア協会主任図書館員および副会長を歴任、Japan EvangelistとThe Christian Movement in Japanの編集者、Chicago Daily Newsの通信員をしていた。

著書には、A Handbook of Modern Japan; Japanese Floral Calendar; Short History of Japan; Constitutional Imperialism in Japan; Japanese Chronology; Fifty Sessions of Japanese Imperial Diet; Numerical Categories in Japanなどがある。

博士は、明治後期から大正時代に活動した、いわば「第二世代」に属する日本研究者であった。コルゲート大学は1908年に名誉神学博士号を授与し、彼の研究と教育の業績を称えた。博士はもの静かな学究タイプであったが、明るく、人々をひきつける魅力を持っていた。その鋭いジャーナリスティックなセンスは父親から、教師としての有能さは母親から受け継いだものであろう。彼は日米の多くの若者たちに感化を与えた。また博士はキリスト者紳士として、高い人格性と奉仕の精神に満ちていた。終生バプテスト教会の忠実な信徒であった。

37年間の日本における教育活動の後、1927年の最終帰国にあたり、日本政府は博士の多年にわたる私立および官立学校における英語教育の功績を顕彰し、勲五等旭日章を授与した。帰国後は、ニューヨーク州ロングアイランドに住む次女ご夫妻のところに身を寄せ、余生を送っていたが、1941年3月11日に地上の生涯を閉じられた。享年81歳であった。ネリー夫人は1949年5月に、同じく81歳で天に召された。

私たちの先駆者にこのようなすぐれた学究・教育者がいたことを誇りにしたい。また私たちはこのような生涯から多くを学ばなければならない。「神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起こしなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい」(ヘブル13・7)。他の国の文化を敬意をもって研究し、その国の教育や福祉の向上のために生涯を捧げる多くの若者が、本学から生まれ、育つとき、「人になれ　奉仕せよ」の校訓が本当に実現したことになろう。また彼らが博士の遺志を継ぐことになろう。

国立国会図書館
デジタルコレクション

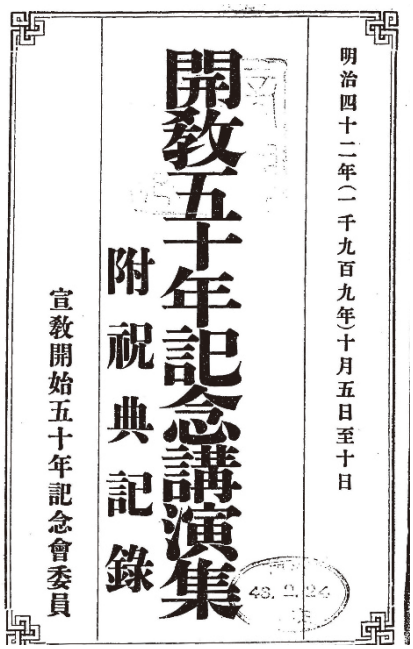
『国立国会図書館デジタルコレクション』は、国立国会図書館で収集・保存しているデジタル資料を検索・閲覧できるサービスです。
著作権など権利状況に問題がないことが確認できたものはインターネット上で公開されています。

学院史資料室

http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/824110

『開教50年記念講演集』
明治42年10月5日-10日

講演内容を記録したこの資料は一般公開されている資料ですのでどなたでもご覧いただけます。
本資料のクレメント先生の講演『日本に於ける基督教教育の情態及結果』が記録されています。


明治四十二年(一千九百九年)十月五日至十日

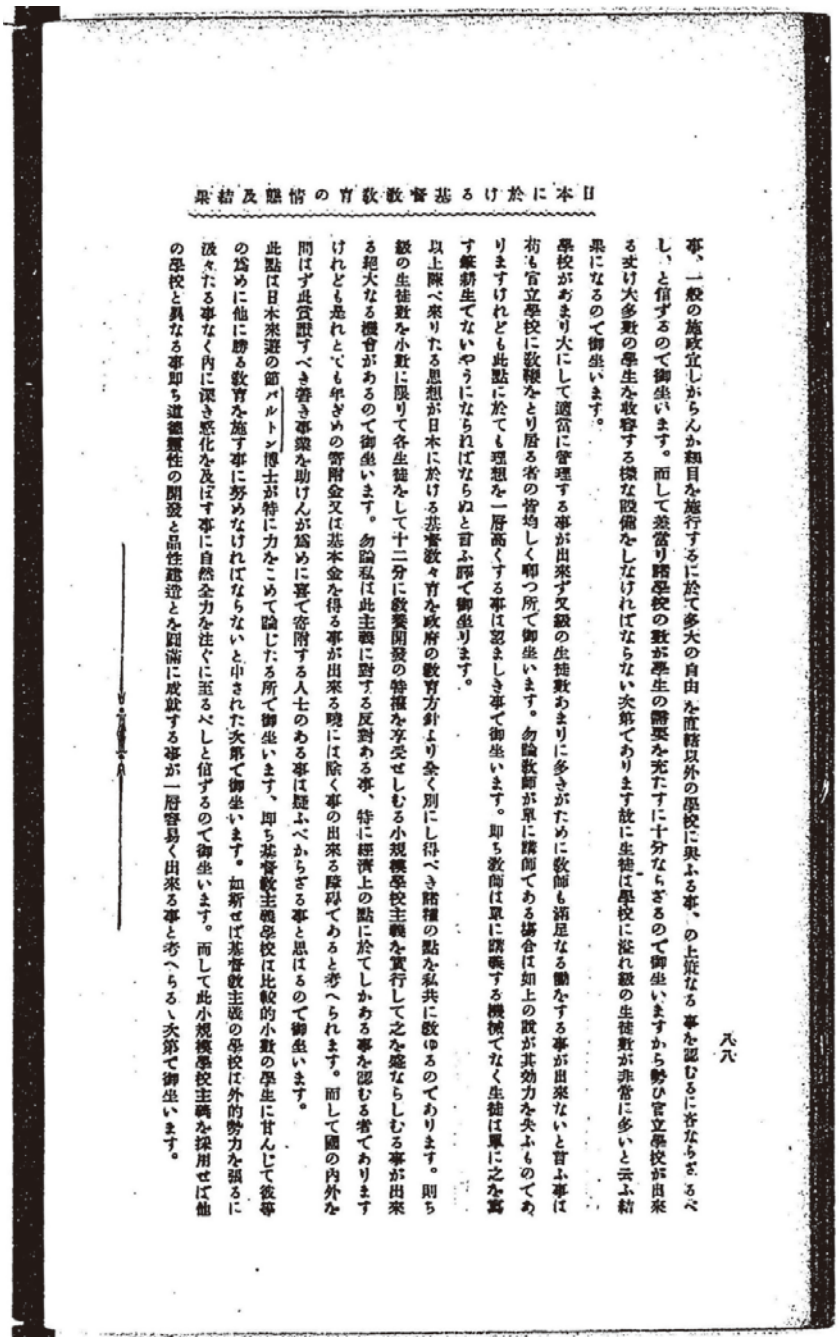
開教五十年記念講演集

附祝典記錄

宣教開始五十年記念會委員

『日本に於ける基督教教育の情態及結果』

クレメントは1009年の開教50周年記念講演において「日本に於ける基督教教育の情態及結果」というテーマで講演したが、その中で「学校があまりに大にして適当に管理する事が出来ず又組の生徒数あまりに多きがために教師も満足なる働きをする事が出来ないという事はいやしくも官立学校に教鞭をとり居る者の皆均しく託つ所で御座います。勿論教師が単に講師である場合は如上の説が其効力を失うものでありますけれどもこの点に於いて理想を一層高くする事は望ましい事で御座います。即ち教師は単に講義をする機械でなく生徒は単に之を写す筆耕生ではないようにならねばならぬと言う訳で御座ります。


日本に於ける基督教教育の情態及結果

八八

事、一般の施政宜しがらんか組目を施行するに於て多大の自由を直轄以外の學校に與ふる事、の上策なる事を認むるに吝ならざるべし、と信ずるので御坐います。而して差當り諸學校の數が學生の需要を充たすに十分ならざるので御坐いますから勢ひ官立學校が出來る丈け大多數の學生を收容する樣な設備をしなければならない次第であります故に生徒は學校に從れ級の生徒數が非常に多いと云ふ結果になるので御坐います。

學校があまり大にして適當に管理する事が出來ず又級の生徒數あまりに多きがために教師も滿足なる働をする事が出來ないと言ふ事は苟も官立學校に教鞭をとり居る者の皆均しく唱つ所で御坐います。勿論教師が單に講師である場合は如上の說が其効力を失ふものでありますけれども此點に於ても理想を一層高くする事は望ましき事で御坐います。即ち教師は單に講義する機械でなく生徒は單に之を寫す筆耕生でないやうになられねばならぬと言ふ譯で御坐ります。

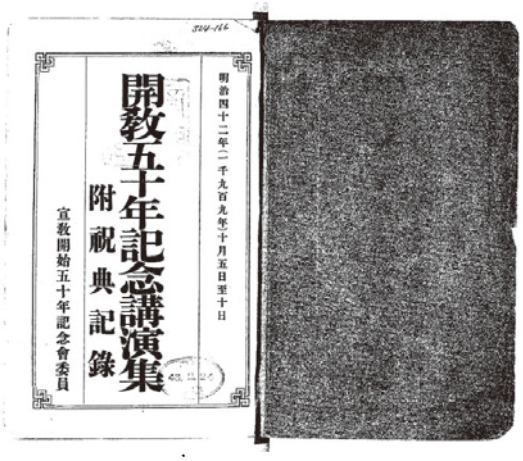
以上陳べ來りたる思想が日本に於ける基督教々育を政府の教育方針より全く別にし得べき諸種の點を私共に敎ゆるのであります。則ち級の生徒數を小數に限りて各生徒をして十二分に敎業開發の特權を享受せしむる小規模學校主義を實行して之を遂ならしむる事が出來る絕大なる機會があるので御坐います。勿論私は此主義に對する反對ある事、特に經濟上の點に於てしかある事を認むる者でありますけれども是れとても卑ざめの寄附金又は基本金を得る事が出來る曉には除く事の出來る障碍であると考へられます。而して國の內外を問はず此賞讃すべき善業を助けんが爲めに喜て寄附する人士のある事は疑ふべからざる事と思はるので御坐います。

此點は日本來遊の節パルトン博士が特に力をこめて論じたる所で御坐います、即ち基督教主義學校は比較的小數の學生に甘んじて彼等の爲めに他に勝る敎育を施す事に努めなければならないと申された次第で御坐います。如斯せば基督教主義の學校は外的勢力を張るに汲々たる事なく內に深き感化を及ぼす事に自然全力を注ぐに至るべしと信ずるので御坐います。而して此小規模學校主義を採用せば他の學校と異なる事即ち道德靈性の開發と品性建造とを圓滿に成就する事が一層容易く出來る事と考へらるゝ次第で御坐います。

E.W.クレメント

以上述べ来たりたる思想が日本に於ける基督教教育を政府の教育方針より全く別にし得べき諸種の点を私共に教ゆるのであります。即ち組の生徒数を少数に限りて各生徒をして十二分に教養開発の特権を享受せしむる小規模学校主義を実行して之を盛んならしむる事が出来る絶大なる機会があるので御座います」と、年来彼が実践して来た少数学校主義を強調し、彼の学校運営の方針を明らかにした。

（『パプテストの東京地区伝道1874-1940』大島良雄著190頁）



明治四十二年一千九百九年十月五日至十日

開教五十年記念講演集

附祝典記録

宣教開始五十年記念會委員

点に集中する事であらうと考へられます。今私が諸君の注意を引かんとする此一点は常問題たる「日本に於ける基督教々育の情態及結果」てふ事を直接に論ずるものではありませんけれどもそれより学ぶべき重且つ大なる一の教訓であるので御坐います。

私が特に諸君の注意を促さんと欲する處の点とは抑も如何なるものなるかと言ふに日本に於ける基督教々育は政府のそれと全く別なる特徴を有すべきものにして政府の定めたる教育制度と競争を試みてはならないと言ふ事でありますが最一層判明ならしめん爲めに私が右の陳述によりて如何なる事を意味し又如何なる事を意味せぬかを説明しやうと思ひます。先づ第一私は競争は善い事でないと言ふ事を申し上げるのではありませぬ。「競争は貿易の生命である」と言ふ事は經済學の確認する處で御坐いまして、ある制限を附すれば右は全く眞理で御坐います。して私は競争は學問教育に於ても生命であると言ふ事を政る範圍までは眞理であると信ずるので御坐います。けれども私は競争と言うも卑劣手段を用ひて他の學校より學生を誘ひ出し、結果その學校を滅すやうにする道ならぬ競争を意味するのではありませぬ。私の申し上げ度いと思ふ競争は各學校が名聲を維持せんが爲めに總ての点に於て絶えず改善を施しつゝあるやうな極めて健全なる競争を意味するので御坐います。要之私は建設的競争を信ずる者でありまして決して破壊的競争を信ずる者ではありません即ち己の學校を興さん爲めには他の學校を倒すも厭はないと言ふやうな道ならぬ競争では御坐いませんで眞に存立の價値ある學校ならば總てみな建設すると言ふやうな極めて穏健なる競争を意味するので御坐います。

而して若し基督教々育にたづさはる人々にして政府の教育制度に關係する當事者が力を注いで居る点と全く別な方面に心を惹して開拓し行くならば如上の健全にして合理なる競争が自然起り來るべき事は少しも疑ふ可らざる事であると考へられます。而して日本に於ては此種の教育策に都合よき特種の條件が備はりあるのであります。即ち教育事業に對する政府の設備が慨はしき程不充分なるが故に私立の宗教學校と雖も諸の設備完全ならんには學生を得るに破壊的競争の方針を採るの要なき次第で御坐います。政府の教育制度は必要上統一的で時に臨て之が改造を許さず繁雑にして手數を要し所謂繁文縟礼の譏を免かるゝ事は出來ません、故に教科要目及訓練の點に於て政府のそれよりも一層多くの種別と時に臨て之を改善し行く事の出來る教育機關即ち學校を設くる事が出來得べき事にして又實に願はしき事であると考へられます。勿論基督教主義學校が世間の信用を得ん爲めには勢ひ政府の示したる教育の法令を遵奉し行かればならぬ事は明なる事で御坐いますけれども政府の教育當事者が其施し居る統一的制度を我等に奴隷的に採用せよと强ゆるの不合理なる

日本に於ける基督教教育の情態及結果

東京學院長
マスター、オブ、アーツ　イー、ダブルユー、クレメント

七分間にて此非常に重大なる問題に對していくらか價値ある説明を與へん事は恰度白妙の富士の高根の雄麗なる姿を郵便繪書の片隅に寫さんと試むる事と同じき事であります。されば此短かい時間で成し得べき事は唯だ一にして即ち私共の思想を此廣大なる問題の只一

（文責　学院史資料室　外崎）

チャールズ・バックリー・テンネー

Charles Buckley Tenny
(1871-1936)

元大学教授　元学院宗教主任
高野　進

C.B.テンネーは、1871年9月10日にニューヨーク州モンロー郡ヒルトンに生れた。ニューヨークというと、私たちは高層摩天楼の林立する、賑やかな大都会を連想する。しかし、このヒルトンはそうではない。ここはニューヨーク州の西部に位置している。今日では、ローチェスター市の郊外になっているが、市の中心部からは、西に約20kmのところにある自然の豊かな土地である。五大湖の一つ、オンタリオ湖岸にあり、今も、白い瀟洒な家々が点在し、緑の美しい牧草地の農村地帯である。「オンタリオ」とはアメリカ・インディアンの言葉では、「大きな湖」の意味である。この湖の北の対岸にはカナダのトロント市がある。約100km西には、バッファロー市がある。この都市はニューヨーク州の中ではニューヨーク市に次ぐ大都市である。そこからはナイアガラの滝が近い。森と湖の美しいところである。

C. B. テンネーの父親の名はデロス・パーキンス・テンネー、母親の名はファニー・エリザベス・リー・テンネーである。テンネー家はアメリカ初期開拓者の家系に属しているといわれる。この地域への入植・定住は、18世紀の終り頃に行なわれていた。両親はこのヒルトンで農場を経営し、果樹園をも持っていた。博士には弟がおられ、後に公務員になっている。果樹の害虫駆除について専門的知識を持っていたので、重んじられ、その分野で貢献したという。

少年チャールズは、1882年、11歳の時にバプテスマを受けて、バプテスト教会の正式会員になっている。幼いうちから、敬虔な両親から真摯な宗教的な訓練を受けている。これがかれの謹厳で誠実な性格の形成に大きな影響を与えたものと考えられる。1887年には、青年チャールズは同じモンロー郡ブロックポートにある師範学校に入学した。この学校の場所はローチェスター市の西約30kmのところにあり、故郷のヒルトンからも遠くはない。1891年に同校を卒業した。この学校は今日では、ニューヨーク州立大学ティーチャーズ・カレッジ・ブロックポート校になっている。この学校を卒業して後、テンネーは同じ州内のウェストチェスター郡ピークスキルの学校で2年間教師の経験を積んだ。この町は、ヒルトンよりも南東にあり、ニューヨーク市の北60kmのところにある。ハドソン川沿いにある。1892年には、テンネーは学校教師を辞めて、ローチェスター大学に入学した。将来について心に秘めたことがあったのであろう。1897年に、彼は大学を卒業し、直ちにローチェスター神学校(大学院)に進んだ。この大学は、もともとは1850年にニューヨーク州西部地区のバプテスト諸教会の協力によって設立されたものである。今日では有力な総合大学になっている。1917年に一時帰国の際に、彼は母校から名誉神学博士号を授与された。神学校の方は、最初は1817年に同州のハミルトン郡に設立されたものにさかのぼることができる。今日では4つの学校が連合体を形成し、コルゲイト・ローチェスター神学校/クローザー神学校/ベックスリー・ホールとなっている。テンネーはこの神学校で優秀な成績を獲得している。彼は特に組織神学と新約聖書ギリシァ語をよく学んだ。彼のギリシァ語の能力は抜群であったといわれる。最終学年では、彼はギリシァ語のティーチング・アシスタントを命じられていた。また在学中に、ローチェスター市内のバプテスト・テンプル教会の宗教教育主事をつとめていた。当時、その教会の信徒数は1,000人を有し、教会学校にも1,000人以上の生徒がいたという。すでに責任ある職務を果たしていたのである。この時期に既に、学者としても、行政家としても、すぐれた素質と能力を持っていることを証明していたわけである。1990年に卒業に際して、彼には二つの招聘があった。一つは、母校のギリシァ語担当助教授職であり、もう一つは、

在学中から関わっていた教会から副牧師職であった。いずれも名誉ある、安定した職務であったが、彼はこれらを辞退して、日本にやって来たわけである。多感な青年時代を過ごしたローチェスター市について、もう少し注目したい。それは彼に直接的にか、間接的にか、影響を及ぼしたと推測される要素があるから。フレデリック・ダグラスが、南北戦争直前にここを拠点として『北極星』(North Star)を発刊して、黒人解放運動を展開し、南部からの逃亡奴隷の救済と支援につとめた。ウォルター・ラウシェンブッシュはここに生れ、ニューヨーク市の貧しい人々の救済を神学的な課題とし、社会的福音を説いた。後に彼はローチェスター神学校の教授として迎えられ、20世紀前半にアメリカ・キリスト教界に大きな影響力を及ぼした。

またスーザン・B・アンソニーがここに住み、女性参政権の獲得のために大きな貢献をした。このような進取の精神がこの町にみなぎっていたので、後に彼を社会的な関心へと向かわせたのであろう。

テンネーは1900年に宣教師として按手礼を受けて、アメリカン・バプステト・ミッショナリー・ユニオンから派遣されて、同年10月に日本にやって来た。最初に神戸に住み、日本語を研修している。1905年に賜暇帰米した時に、彼はグレース・E・ウエッブと結婚した。彼女はローチェスター市の生れで、マウント・ホーリヨーク・カレッジの卒業生である。彼女はテンネーが在学中に奉仕をしていた教会の会員であった。

1905 ～ 1908年には、テンネー夫妻は京都で宣教活動に従事した。京都は学問の伝統があり、神社・仏閣も多いので、キリスト教の宣教師や牧師たちも、学殖のある者が派遣されていた。テンネーもその一人である。夫人も教会奉仕と公立の中学校などで英語を教えている。結核を患っている女性を訪ね、栄養のある料理を作ってあげたり、教会堂の建築資金募金に尽力し、教会堂掃除にも率先して奉仕したという。1908年にテンネーは横浜バプテスト神学校教授に迎えられた。博士はギリシァ語と新約聖書釈義を担当した。これは当時の校長デーリング博士の招きによる。まことに当を得た補充人事であった。実は、その年に、デーリング博士は極東地区全体のアメリカ・バプテスト派宣教師の責任者となり、神学校の職務を離れなければならなかった。翌年、1909年には、同神学校創設者であり、新約聖書と説教学の教授であったベンネット博士が天に召された。個人的にも、彼はこの時期に悲しい出来事に遭遇した。1910年に夫人は出産の際に天に召された。生れたばかりの令息ポールも母親を追うようにして亡くなった。このため博士は深い悲しみを心の中に負うて生きるようになった。横浜山手の外人墓地の中で、テンネー博士の夫人グレースと令息ポールはベンネット博士の墓近くに眠っている。

その後、1914年に博士は岡山で宣教活動していたペティー氏夫妻の令嬢エリザベス・ペティーと再婚した。彼女はグレースと同じくマウント・ホーリヨーク・カレッジの出身で、1 年後輩になる。再び、心からの理解者・協力者を得たことになる。1910年には、神学校は東京に移り、日本バプテスト神学校と改称している。この学校は財政上のきびしさもあり、やがてアメリカ南部バプテスト派の日本における神学校である福岡バプテスト神学校と連合した。しかしこれは長く続かず、1917年にはこの連合学校は分離した。南部バプテスト派の神学校は西南学院の中に設立されることになった。しかしこれを機会に、1919年には、日本バプテスト神学校は既に予科として学生を送り込んでいた関係もあり、東京学院の高等学部(文部省認可の旧制の専門学校)と合併した。この間、テンネーは短い期間であるが、この神学校長を二期つとめた。また合併後の東京学院の学院長はテンネーが引き受けた。

1916年にさかのぼるが、東京学院の理事長を努めていたテンネーは、その中学部を閉校して、東京以外の土地において再出発するという方針を英断・実行した。将来の発展のためには、学校組織の近代化と学生数の増加がぜひ必要である、と彼は判断した。このために博士はまずアメリカ人の同僚宣教師を説得しなければならなかった。彼らの間では、派遣されている限られたスタッフと財源を学校建設と維持のために使うよりも、直接の宣教活動と教会形成のために、これらを重点的に当てるべきであるという意見が強かった。本国の支援母体も新たな学校建設のための財政的余裕はなかった。しかしこのような困難をも乗り越えて、この計画を実現するために、テンネーはアメリカ本国に戻り、日夜奔走し、熱心に支援を訴えて回った。こうして横浜市南区三春台に関東学院が発足することになった。

その設立披露の会は1919年1月27日に横浜開港記念会館で行われた。そこで設立者・理事長として、博士は学校の方針をこう述べた。[基督教報1919,490号]

「学校の方針は、(1)これを日本の学校とすること、(2)充分なる教育機関とすること、(3)人格の形成に重点をおくことである。アメリカ人が、このために寄付したのは、世界人類はみな同胞兄弟であるという観念からで、これは、アメリカ人が日本人の友だちであるというしるしである。」

これは今日では当然のように感じられるが、アメリカでは、反日感情が日増しに険悪になり、日本では、狭隘なナショナリズムが台頭してきた時代に、多額な寄付をして、学校をつくり、日本人に経営を委せようとすること自体が、大胆な企てであった。それは「世界人類が同胞兄弟である」からなのだと彼は言う。全能の神の前にすべての人々が兄弟姉妹であるというキリスト教的視野が確認されている。「充分な教育機関」とするのは，優秀なる教師と設備を備え、高いレベルの教育を目指したわけである。「人格の形成」は戦後の教育基本法が掲げるにいたったものを既に先取りしていたと言える。知性確立と人格の形成は両立しなければならない、と彼は確信していた。

1927年には東京学院の高等学部と神学部が関東学院に移管され、財団法人関東学院が組織された。こうして関東学院は神学部、社会事業部、高等商業部、中学部を構成するに至った。学院長はテンネー博士であった。博士は若い時期に教師としての訓練を受け、実際の経験もあったので、教師としての情熱を持って真剣に若い人々に接した。神学校では新約聖書とギリシァ語を教えた。博士の感化を受けて新約聖書学を専門研究分野とした卒業生が多い。高等商業部ではテーラー式ファイリング・システムを担当し、最新の科学的な経営管理と事務処理法を教えた。夫人も英会話と西欧のマナーを教えた。テンネー博士が学院長の時代の1931年に、関東学院の学生たちによるセッツルメント(社会福祉センター)活動が神奈川区浦島町に始まった。博士自身学生時代にスラム街で奉仕をした経験があった。

社会事業部ができたのは博士の夢の実現でもあった。しかしやがてこの活動は官憲に弾圧されて、閉鎖にいたった。この時期に博士は激務と心労のために健康を害し、学院長の任務を千葉勇五郎に委ね、1930年に帰国しなければならなくなった。

博士の遺産は、日本においては学校教育が重要であると気が付き、これに全精力を注いだことである。確かに博士は、優れた教育者として多くの学生たちに感化を与えた。また有能な教育行政家として、東京学院と関東学院を学校としての近代化と組織化を推進するために心血を注いだ。まず博士は日本バプテスト神学校を東京学院の高等学部に結び付けた。それから東京学院の中学部を閉鎖した。そして新天地を横浜に求めて、中学関東学院を三春台に設置した。そのうえで、東京学院の高等学部を関東学院の機構に組入れた。こうして今日の大関東学院の発展の可能性を用意した。

博士はこれを1913年から1927年の15年間でやっている。しかもこの時期に、第1 次世界大戦が勃発し、1923年の関東大震災のために横浜の新築間もない校舎が崩壊したために、もう一度ゼロから始めねばならなかった。アメリカでは、排日法が成立している時代でもある。そして大恐慌が近づいていた。このような酷しい状況下で、人一倍責任感の強い博士のことであったから、これだけの重荷を一手に引き受けていた。それゆえ「先生は終始不眠症のために非常に煩わされて、想像以上の苦痛を感ぜられた」と神学校の後輩であり、後に東京都名誉都民に推されたW.アキスリング博士はテンネー博士の健康状態について記している。

こうして、とにかく関東大震災の後に、再建された建物が戦火を経て今日なお三春台の中学校の建物として残っている*。これは横浜市から歴史的な建物として指名を受けているが、これこそ博士の残した労苦のモニュメントと言えよう。〔*2016年老朽化により解体〕

博士は繊細な芸術家の素質を持っており、オルガンを演奏し、詩を書いた。ロングフェロー、ワーズワース、ブラウニング、

テニスンなどの詩を愛した。博士は横浜バプテスト神学校の初代校長のベンネット博士の葬儀のオルガン演奏をしている。その生涯を共感をもって深く思い、心から敬愛し、先駆者を天に送った。

博士は今日でも歌われるカレッジ・ソングの作詞と作曲をしている。これは学生生活を楽しく歌いあげたものである。今日でも広く、深く浸透している関東学院のリベラリズムの気風が、ここに活き活きと表現されている。またテニスを楽しみ、スポーツの興隆にも力を注いだ。こうして博士は今日の関東学院の組織、建物、学風の基礎を敷いたのである。

テンネー博士は日本になお思い残すことが多かったが、過労のために病を患い、帰国のやむなきに至った。母国での療養生活は5 年間続いた。しかしついに任務に復帰することなく、1936年1月11日に天に召された。博士の墓は故郷のヒルトンのパーマー・ユニオン墓地にある。この墓には，同じ年の6月13日に博士を追うようにして亡くなった夫人エリザベス・ペティーも共に眠っている。博士の墓に記された名前の下には、このような短い文が記されている。

"FOR THIRTY YEARS A MISSIONARY IN JAPAN"

「日本において30年間宣教師をつとめた」

博士にふさわしい、まことに謙虚な、飾らない表現である。ここには、事実だけが述べられ、どんな賞賛の形容詞もつけられていない。この表現は彼の遺言によったのであろうか。決して自ら人を押し退けて表面に出ることをされなかった、博士の人生そのものがここ簡潔にまとめられている。彼は日本において学校の設立と運営のために骨身を惜しむことがなかった。しかも日本人の指導者たちを全面に立て、彼らを支援し、彼らの間の調整に腐心する裏方に徹した。たしかに博士は公的な舞台の前面に出ることが少なかったので、一般の世の賞賛や、評価を得ることはなかった。しかし隠れたところにいまし、隠れたところを見ておられる方は、彼の働きを十分ご存知であろう。同労者で友人のアキスリング博士は逝去記事の中で博士をこう評価している。「まことの意味で、彼は日本におけるキリスト教教育のために、殉死した人であった」と。夫人エリザベスの名前の下には、次のような短い言葉がある。HIS LOYAL PARTNER IN SERVICE「奉仕における彼の忠実な同労者」。この「His」は先ず「夫テンネーの」と解することになろうが、「主キリストの」と解することも可能である。夫妻は共にこのために日本に派遣され、互いに同労者として、忠実に主なるキリストのために奉仕したのである。一般に英語辞典の定義によれば「PARTNER」は、しばしば二人の間の関係を表わす。それぞれが平等の身分と、ある程度の独立性を持つ。

生前のテンネーは横浜外国人墓地に眠る先妻グレースと息子ポールの墓標の自分の名前を記した。既に眠る二人と自分が同じ所にいるという証である。肩書きは夫人と同様の「アメリカ・バプテスト外国宣教協会宣教師」のみである。その肩書きをもって表わす使命と仕事が彼の生き甲斐であった。

「こうして、(わたしたちは)いつも主と共にいるであろう。」(Iテサロニケ4：17 b)これがギリシァ文字の意味である。これは最後の日のよみがえりを預言する言葉である。テンネーは愛する妻と生れたばかりの子を異郷に葬るに際して、復活の希望を信じて，ここに記す。地上ではしばらく離れ離れであっても、やがては、主のみもとで、再び彼らと共にいることができる、という聖書の言葉によって、彼は慰めを得ている。自分はこの聖書の「よきおとずれ」を伝えるために、日本に来ているのである。そう自分自身に言い聞かせていたのであろう。こうすることによって、博士はここに自分に対する主の慰めを記しただけでなく、自分に起こった悲しい出来事を通してまでも、まことに慰めの主が生きて、働いておられることを身をもって告知すべき使命を新たにし、ここにこの言葉を刻んだのである。

創立二十周年を前に

去逝く人々

名誉院長 テンネー博士 急逝せらる

『自然・人間・社会』No.22(1997年発行)より一部を転載

【画像】 提供：学院史資料室(番号は掲載順)

① テンネー夫妻(テンネーアルバムより)
② 籠球部 (中央にテンネー)
③ テンネー在任時の三春台校舎
④ テンネーと学生の食事会(院長宅にて)
⑤ パイプオルガンとテンネー(テンネーアルバムより)
⑥ テンネーと家族
⑦ 横浜外国人墓地のテンネー夫人と令息ポールの墓
⑧ テンネーの召天を報じた『関東学院高等時報』

『グレセット先生のことども』

グレセット博士
James Fullerton Gressitt
(1883-1945)

元中高校長（当時副校長）
山本　太郎

『会報』　昭和31年10月12日より

ジェームス・フラートン・グレセット先生は1907（明治40）年10月にアメリカ・バプテスト教派の宣教師として日本に赴任されて以来、1945（昭和20）年9月永眠されるまで38年の長い間よきキリストの下僕としてこの国に奉仕せられたのであるが、実はその期間の大部分は我が関東学院とその前身たる東京学院のためにささげられたものである。従って先生から教えを受けた卒業生もその数は数千名に達し彼らは多かれ少かれその人格的感化をうけて人となったのである。

見るからにその聡明を物語る広き額、深き淵の如く青く澄んだその瞳、あくまでも物静かな哲人の如きそのもの腰、而も何時も変わらぬ温厚さで一人一人の為に心を配り生徒を一人の人格者として対等の否むしろ尊敬する様な態度であつかって下さった先生の姿はすべての教え子の胸に今もまざまざと甦って来る想出である。

先生は東京学院の院長であられた事もあり関東学院になってからもその法人の理事として学校経営の責任を分担せられ坂田院長を終始助けられた。しかし先生は同時に又非常に優れた天文学者でもあった。1925（大正14）年夫人の御病気のために帰米せられ4年間滞在せられたのであったがその期間にはカルフォルニヤ州オークランドにあるChabot天文台につとめられ又有名な女子大学ミルス・カレッヂの教授を兼任せられていた事もある。又この間に賀川豊彦の「愛の科学」を英訳せられて"Love the Law of Life"と言う題の下に米国並に英国から同時に出版された事も付記していい事と思う。

グレセット記念講堂　1952年完工

太平洋戦争が始まるや、すべての外国人は国外に退去せしめられたが、先生は最後まで日本を愛したとえどの様なひどい目にあってもこの国の土になることこそ望ましいと遂いに最後まで敵国にふみ止まり、日本人と戦争の滲苦を共にせられた。先生の宣教師としての正しい態度と日本への愛はさすがに東条政府にも理解され敵国人としては破格の行動の自由を与えられておられた。終戦になるや否や先生は賀川豊彦氏と共に日本進駐直後のマッカーサー元帥に面会せられて、日本再建へのよき忠言をなされ、それがマ元帥の日本占領政策に可成りの程度に反影されたと思われるふしがある。又米軍進駐と共に会見リンズレー・グレセット博士が海軍大尉として日本に到着し父上と涙の対面をせられたのであった。そしてその計いで直ちに海軍機にて帰国せられる様に手配せられ、厚木飛行場に赴かれたのであったがその乗機直前に病のために倒れられ遂に米国の地を踏む事なく、最後まで愛せられた日本の土と化せられたのである。長い戦時中の栄養失調症がその病名であった事はまことに痛ましい限りである。

その葬儀は東京富士見町教会に於て日米合同にて盛大にもよおされたが紺色の米国海軍将校の正装に身を包んだ令息グレセット博士のよどみなく美しい日本語の挨拶は当時極めて印象的なものであった。

我学院は先生の奉仕を永久に記念する為めに講堂を建て、それをグレセット記念講堂とした。それは先生の性格を示めすかの如く、単純にして新しい精進に満ちたものである事は既に諸君の知っている所である。吾々はここにその令息を2回迎えた。昆虫学の世界的な学者である。彼は現在ハワイに在って太平洋地域の昆虫の特殊研究に従事しているがその研究のために来日せられた折、わざわざ父上を記念する講堂を見に来られたのである。

又去る8月14日に令嬢のフエリシア・ボック夫人が2か月の予定で来日せられたがその日の午後旅荷を解くひまもなく学院を訪ねグレセット講堂をみられたのである。

ボック夫人は加州バークレーに在住のため筆者が滞米中

は再三訪問して旧知の間柄でもあったので彼女の日本滞在中出来るだけの事をしたいと思っている。去る13日、中学校、高等学校生徒のためにグレセット記念講堂の檀上より話していただいた事も彼女の来日を意義づける事の一つであったろう。又亡き父上の墓石をつくる事もその旅行の目的の一つであったが我学院の水船六洲先生がそのデザインを引受け奉仕せられるに到ったのでこれ又いささかなりとも亡き先生への報恩なりと喜んでいる次第。人間を結ぶ真の友情、愛と言うものは国籍や人種の差別を超え、それらのものに優先する。戦争は人類の憎情を深め、キリスト教宣教師は愛と奉仕の福音を普ねく広める役目をする。吾々は過ぎし大戦争とグレセット先生の寡照なる生涯を通してその事の事実なる事を熟知せしめられたのである。

附記

先生の御令室エドナ夫人は天賦の詩人であられた。戦前、東京日米印刷社から"Lyrics by the way"と題される英語集を刊行されたがいずれ機会を見て御紹介したいと思う。

グレセット先生の横顔

磯　鐐太郎

故宣教師J・F・グレセット先生の横顔を一口に言えば、聖書を身讀し、實踐した人と言う事で盡きると思う。ラッパを吹き立てて衆人の前で祈るようなことはしなかった人であり、身を以て宣教の實を擧げた人である。本も書かなかった。説教旅行もしなかった。彼の名前の表面化する仕事は一切しなかった。いつでも綠の下の力石を甘受し、骨を折って他人の名を世に出した人である。であるから、知る人は知り、知らない人が多いのであろう。派手嫌いな、地味な宣教師であった。

私は關東學院社會事業科第一回の出身であるが、浸禮なぞは夢にも考えなかったし、聖書も讀んだ事はなかった。私は先生の日常生活を見て、はじめてクリスチャンの眞價を知り、自然に頭がさがった。聖書を手にするようになった。「己が前にラッパを鳴らすな」、「右の手のなすことを左の手に知らすな」の聖句に引きつけられた。グレセット先生の實踐生活にキリストのすがたを發見し、思わず神の御前にひれふした。私は先生の言葉のすすめで受浸したのではなく、先生の實踐生活を通して、神を知り、弟子になりたいばかりに浸禮を受けないではいられなかった。ほんとうに嬉しかった。こんな感激は一生ないのにきまっている。私はグレセット先生に依って信仰の眞髄にふれ、救われた。生甲斐が出たのである。

この事は私だけの體驗ではない。先生の昇天は日本の救靈の爲殘念であったが、昭和20年11月の葬儀の模様を思い出す。物資不足の敗戰直後である。先生の棺も、米軍將校である息子リンズレーさんですら調達出來ず、空荷箱で間に合わせた始末であるのに、どうしてあんな立派な葬儀が出來たのであろうか。麹町富士見町教會の前は生花、造花で飯田橋驛前まで飾られ、當日は米軍の命令で日本人は電車に乗る事が出來ず、勿論、自動車等は考えることも出來なっかたのに、さすがの教會堂も道路まであふれる盛況であった。しかも、參會者のほとんどが異教徒であった。先生の德を追慕した異教徒の集まりであり、最後の惜別に遙々遠路を歩いてきたのである。中には自家用車を此の葬儀に献げ、自らは徒歩で參列した人も數人あったので、行列に自動車を使用する事が出來たのである。異教徒の盡力でかくも盛大な葬儀となり、風の便りに聞きつけた各新聞社が駆けつけ、國際親善ニュースの特種として初號活字で報道された。蔭の葬儀委員長とも言うべき前大政翼賛會總務局長大石三良氏は「グレセット先生を通して聖書をはじめて讀んだ」と語られ、聖書は今日なお書齋に飾っておられる。先生御存命であれば、これ等の人々を受浸まで導けたにちがいない。今一歩で惜しいと思うが、併し、これだけの異教徒に先生を通してクリスチャンの眞價を知らせ得たのは、不幸中の幸である。一回か二回の御説教や講演で決心カードを集めて、ほくそ笑んでいる傳道とは、天と地の差異ではあるまいか。

15年前のクリスマス・イヴを思い出す。少年補導會の少年達を招いて御馳走して下さった際、先生はキリストのキの字もお話にならず、デコレーションの星の話から天體の説明をされた。それが實は先生の名説教であったのであろう。戰後、アキスリング博士の巡回傳道の會場で名乗り出たある青年醫師こそ、この夜招かれた少年であった。立派なクリスチャンになっていたのである。

米將マッカーサーが横濱に進駐まもなく、世界人と言われる某牧師の當時の活躍が各新聞に大々的に取りあげられたのであるが、その陰には、戰時中の軟禁に疲れ果てた肉體に自ら笞うち、象の様に腫れあがった足を引きずって、某牧師をマッカーサー元帥に引き合せ、何かと世話されたグレセット先生があった。

グレセット先生が御自分の俸給をさいて經常費に充てて、遺された少年補導會の仕事は、先生の信仰實踐の表現である。私はどんなに苦しんでも此の仕事は一生續ける決心である。あわれな少年はここにいます、とラッパを吹いて衆人に見物させなければ、社會事業は成立しないのであろうか。ましてや扱少年は犯罪者であり、20歳前後である。人知れず補導援護することこそ私共の使命である。どこまでも床下の力石を自任せねば出來ぬ社會事業だけに、この種事業に手を出す人がない。だが、眞のクリスチャンであれば、出來ないはずがないし、判らぬとは思えぬ。人に知られんが爲に良き業をするのではない。自分を勘定に入れて社會事業はすべきではない、とはグレセット先生の遺された教えであった。

もう一度味わっていただこう、先生の横顔を表現した聖句を。

「汝ら見られんために己が義を人の前にて行わぬように心せよ。」

（基督教少年補導會主事）

新生 第59号（1955/2/1）、シリーズ『新生會群像2』より

『タッピング宣教師夫妻の教育の働き』

ヘンリー・タッピング
Henry Topping
(1857-1942)

元大学教授　元学院宗教主任
帆苅（ほがり）　猛（たけし）

最初のバプテスト派の宣教師として1873年に来日したネイサン・ブラウンとジョナサン・ゴーブルにとっては、福音を日本に伝えるために聖書を日本語に翻訳することが第一の課題であり、彼らはそのことに全力を注いで伝道につなげていこうとしました。この点でのバプテスト派の業績も大きなものです。その後を引き継いだ宣教師たちが最も力を尽くしたのは伝道です。そして、教育にも力を注いできました。本稿では、そのヘンリー・タッピング、ジェネビーブ・タッピング宣教師夫妻の働きを中心に述べ、日本におけるバプテストの教育活動の一端をご紹介します。

タッピング宣教師夫妻は1895年11月10日に来日し、当時の外国人居留地であった築地に居住します。ヘンリー師は、バプテスト派の普通学校として東京中学院（関東学院の前身）開設するのに伴い、教師として招かれました。妻のジェネビーブ師は、保育、音楽、神学の専門的な学びをし、幼稚園教諭の経験もあることから、同じ宣教師仲間の子どもたちの保育を託されました。来日翌年の1896年、彼女は日本人のための幼稚園および保育者養成施設を開設します。当時、宣教師仲間の中には、宣教団体の承認を得ずにこのような事業を進めたことに対し、批判的な意見を持つ人も少なくなかったようです。タッピング宣教師夫妻にとっては、幼児教育事業が「反キリスト教的な日本人が反対しない唯一の宣教活動」であり、幼児教育を介し、キリスト教伝道につなげていくという思いがあったと伝えられています。

ジェネビーブ師にとっては、日本で日本人のために彼女が奉仕できる唯一の働きが幼稚園設立と幼稚園教諭養成との思いもあったと思われます。彼女の活動に、ロールマンやファイフといった女性宣教師も協力しました。

彼女がもたらした保育の特徴は、ピアノのリズムに合わせ、子どもたちが自ら感じたことを自由に表現する音楽表現（「律動」）や、欧米から取り寄せた遊具・教材を用いて子どもたちを自由な遊びに導く、自由活動が中心だったようです。これは、幼稚園の創設者ともいわれるドイツ人フレーベルの考え方を受け継いだものです。ジェネビーブ師は、自ら教えた学生の一人、石原キクを後継者として選び、アメリカで学ばせます。周知のように、石原キク先生はその後、50年余り、彰栄での幼稚園教諭、保育士養成のため生涯を献げられました。

ヘンリー師が教師として働いた東京中学院は、場所も不便で、設備も不十分であったため、1899年、牛込区佐内町に移転し「東京学院」と改名します。同時期に、タッピング宣教師夫妻はYMCA活動ともつながり、宣教師館で青年た

ちのためにバイブルクラスを開きます。後に関東学院を設立する坂田祐も、このバイブルクラスに出席し、タッピング宣教師の指導を受け、1903年にバプテスマを受けます。タッピング宣教師は中国、フィリピンの留学生も東京学院に受け入れ、キリスト教教育を行っています。

タッピング宣教師夫妻は、本国のミッションの都合で、1907年、盛岡へ移ります。ヘンリー師は伝道の傍ら、盛岡高等農林学校などの英語講師を務め、家庭ではバイブルクラスを開き青年たちを指導します。そこでは詩人・童話作家の宮沢賢治とも親しく交わり、賢治がタッピング宣教師一家についてうたった詩も残されています。このほか、タッピング宣教師夫妻のもとで安村三郎、波岡三郎、中居京、多田貞三など、バプテストを代表する多くの青年たちが育ちます。

ジェネビーブ師は盛岡に移るとまもなく、岩手県で最初の幼稚園、盛岡幼稚園を設立し、幼児教育のパイオニアとして大きな影響を与えます。保育をするにあたって、彼女はアメリカからピアノを取り寄せます。これが、盛岡では初めてのピアノであり、幼稚園の子どもたちにとっては大きな驚きだったようです。このピアノは幼稚園の子どもたちを喜ばせたばかりではなく、地域の方がたにも開放され、演奏会で用いられ、洋楽を志す人々に貸し出され、盛岡の洋楽の発展にも寄与します。

タッピング宣教師夫妻は盛岡で12年余り過ごし、冬の寒さのため夫婦共に体調を崩し1919年9月に帰国します。しかし1922年に、夫妻で再来日し、横浜に住み、ヘンリー師は東京学院などで教えます。翌1923年に起きた関東大震災により横浜も大きな被害を受けます。夫妻で、被災した人たちを援助し、ジェネビーブ師は、被災した子どもたちを受け入れ援助するため、日本バプテスト横浜教会に「寿町保育園」を開設します。近隣の人たちに大変感謝されたと伝えられています。タッピング宣教師夫妻は、1925年にアメリカに帰国し、1927年に宣教師を引退します。しかし、1928年に再来日し、娘ヘレンさんが協力していた賀川豊彦の活動を支援します。

ヘンリー師は1942年に召天しますが、ジェネビーブ師は戦中も軟禁状態にありながら日本にとどまります。関東学院の責任を担っていた坂田祐が、時折、ジェネビーブ師を訪問したことは、坂田の日記に記されています。

彰栄学園をはじめ、盛岡、横浜、と複数回にわたり戦前、戦中、戦後と来日し、教育を通してキリスト教宣教にたずさわったタッピング宣教師夫妻の働きを簡単に紹介させていただきました。バプテスト・デーに、再びわたしたちの信仰が燃やされ、この働きに続く思いが与えられますように。

JAPAN BAPTIST vol.311 2018/02 より転載

【写真】 提供：学院史資料室（番号は掲載順）

① 盛岡城跡公園（岩手公園）内にある宮沢賢治「岩手公園」の詩碑
② 「バプテストの東北伝道」（中央タッピング一家、左端は安村三郎氏）
③ タッピング夫妻
④ 1962年、エバリン（息子ウィラードの妻）の寄付を元に寄付金を集め「タッピング・ポンド」を竣工（1963-2005）
⑤ 2006年に移設された現在の「タッピング・ポンド」（6号館前）

コベルと硫黄島戦に従軍した息子デビット

James Howard Covell
(1896-1943)

中学校高等学校　元宗教主任
海老坪　眞

J・H・コベルは1896年米国ペンシルバニア州アテネのバプテスト教会牧師ミルトンを父、母エレンの三男として生れました。コベルの妻になるM・M・チャーマは1895年米国オハイオ州フルトンハイムで医師チャールズを父、母ミニー・メーの長女として生れました。

二人は宣教師のためのオリエンテーション会議で会っただけの間でした。二人は香取丸に乗船して1920年に来日しました。彼は1919年新しく設立したばかりの中学関東学院で(教育)宣教師として働きました。その時の院長は坂田祐でした。二人は来日2年後に結婚し、二人の間には1923年に長女マーガレット、1925年に男子デビッド、1927年に次女アリスが生まれました。

二人が来日した時代の世界情勢には1918年世界大戦終結、1919年パリ国際会議や朝鮮では三・一独立運動、1920年国際連盟成立、更に翌年には国際軍縮会議のような動きがありました。

国内では1925年「陸軍現役将校学校配属令」により公立学校に将校を配属しました。私学は申請すれば派遣してくれる制度でした。関東学院は発令のあった年に申請しています。その事はコベルの苦渋の課題でした。彼は国の母に手紙で『軍事教練に反対することは不可能と思われます。私個人としてはそのコースをして神に結論をゆだねたらと思っています。わたしの願いは「わたしは反対している」と少年たちに絶え間ない努力をして教えることです』とあります。

コベルが喜んだのは1928年の「パリ不戦条約(戦争放棄条約)」です。その条約文を額におさめて生徒の通る廊下に提示しました。その時の額をわたしは大切に保存しています。コベルの書斎の壁には、旧約聖書イザヤ書にある「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」を絵画にした物がありました。

彼は自分の便箋や封筒に“Friendship Not Battleship”(戦艦ではなく友情を)というスローガンをプリントしていました。また彼は知人がデビッドに刀や鉄砲の玩具を与えようとすると即座に断っていました。

コベル一家が1935年6月、休暇で帰国していた時期には、かの有名な坂西志保女史に会っています。坂田院長も1924年に米国旅行した際に彼女に会っています。彼女は捜眞女学校専門科を卒業、教員免許を取得して最初の就職先が中学関東学院でした。当時女子の教員が男子校の教師になるのはごくまれでした。彼女は2年後に渡米し、努力の結果アメリカ議会図書館日本課長の任務に就いています。

コベル一家が休暇を終えて来日した1936年9月13日に上陸に際してすんなりとは許可されず、坂田院長が引き取る形で上陸できたと院長から聞いたことがあります。それから10月15日再来日したケナード宣教師は上陸拒否されています。翌日の東京日日新聞に**≪15日来朝した米国バプテスト教会宣教師で、文学、哲学、宗教の三博士のケナードは共産主義的思想を抱持し、反戦主義者なるの故をもって、内務省**

の方針を体した神奈川県外事課により、夫人や令嬢と共に入国禁止処分に付された≫（一部省略）とあります。コベルはこのような時代にケナードより1ヵ月前に再来日できたのでした。コベルは徹底的な平和主義者として宣教活動が困難になりつつあったので自主的にフィリピンのパナイ島に行ったのは1939年6月でした。

そのパナイ島（四国の半分程）に日本軍が上陸作戦を開始したのは1942年4月でした。1943年7月から半年間パナイ島のゲリラや米軍関係者や米国市民を発見したら殺害するという宣告ビラを撒かれていました。そのような危機的事態の12月にコベル夫妻等11人は斬首されました。わたしは2003年3月その斬首された現場に行った時、無意識の内に跪いて祈っていました。コベルはわたしが中学1年生の時、英語の発音を教えてくれていた先生でしたので殊更厳粛なひと時を過ごしました。

ここからはコベルの息子デビッドの話に入ります。わたしの知っていた彼は1939年6月に日本を去るまでです。彼は両親と共にパナイ島に行き2年後に米国に行きました。

今年7月にデビッドの孫のご夫人ケリー・あき子さんが里帰り序に私に会いたいとの事、半日を関東学院高校で会ってお互いの立場で情報交換をしました。コベルホールを案内しました。午後からは坂田記念館に移ってコベル関係の資料を紹介しました。

今回彼女から貴重な資料を頂戴しました。デビッドの“MY LIFE STORY”でした。そこから知って驚いたことには彼が米軍海兵隊員であった事でした。彼は徴兵年齢に達し陸軍では身体検査の結果、痩せすぎているので不合格、4ヵ月後海軍では採用されました。彼は日本語が出来たので、日本軍兵士の捕虜から様々な情報を探る仕事が任務でした。デビットはサイパン島やテニアン島でも従軍していましたが、テニアン島で彼は赤痢にかかったこともありました。

デビットが最後に作戦に参加したのは硫黄島戦でした。1945年2月19日に作戦を開始しましたが硫黄島作戦は今までの島々の場合より難儀でした。日本軍が徹底的長期戦のために予め坑道と称した地下トンネル構築合計18kmに及ぶ坑道を作っていました。そのために長期戦でしたがデビットは勝利間違いなしとする3月20日にハワイ州マウイ島の本隊へ引き上げています。日本軍が硫黄島玉砕したのはそれから4日後3月24日でした。デビッドの手記には海兵隊6千人戦死、負傷者2万人だとあります。

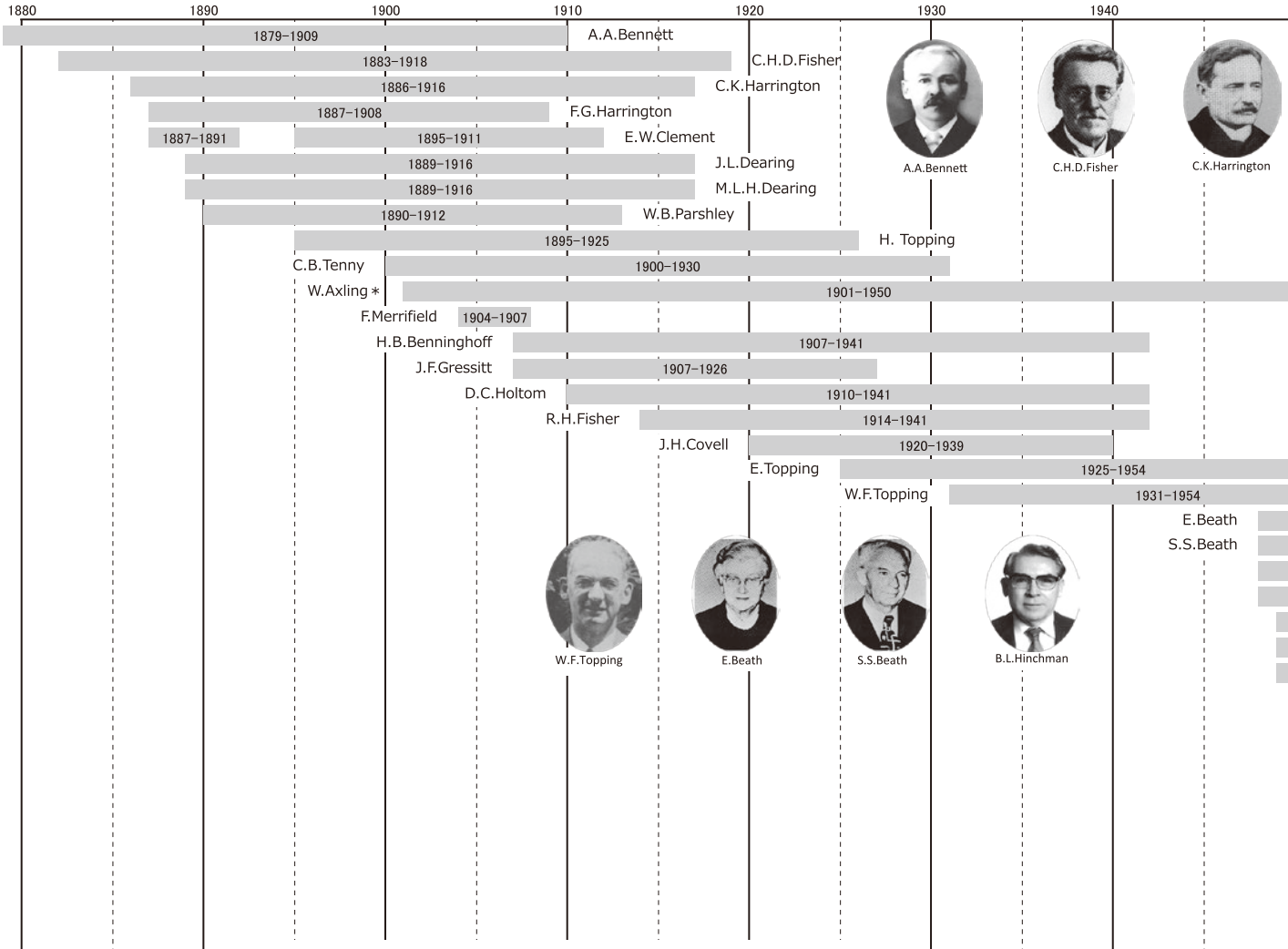
デビッドは両親が日本軍によって斬首されたことを知ったのは1945年3月マウイ島基地に戻った時点でした。彼の悲しみは想像を絶するものだったに違いありません。

デビッドは対日戦争が終って1955年頃からIBMに就職し、1982年から3年間日本のIBMの仕事で来日し、関東学院訪問や旧宣教師館跡地を訪ねています。

デビッドは彼の召天2年前の2009年に彼の夫人に口述筆記してもらって“MY LIFE STORY”を完成させた時、デビッドが付け加えたコメントが次の通りでした。

《どの家族も、家族の物語を持っている。そして、それぞれの家族の一人ひとりの物語は、残された家族にとって、大切にされるにふさわしいものばかりであるが、それ以上に、将来の世代にとって、かけがえのない価値のあるものである。ここに私が詳しく綴った、私が経験したことを知ることがなければ、家族の誰も、第2次世界大戦に参加したということが、どういうことだったのか、参加した人にとって何をもたらし、どのような意味を持ったのかを想像することは困難であろう。私は、Covell家の子孫の誰もが、二度と戦争の困難や悲惨を体験させられるようなことが無いことを、心から希望し祈るものである》でした。

新郎新婦を中央に左側が祖父のデビット右側がデビットの妻
（ケリー・あき子氏提供）



関東学院で奉仕した主な宣教師たち

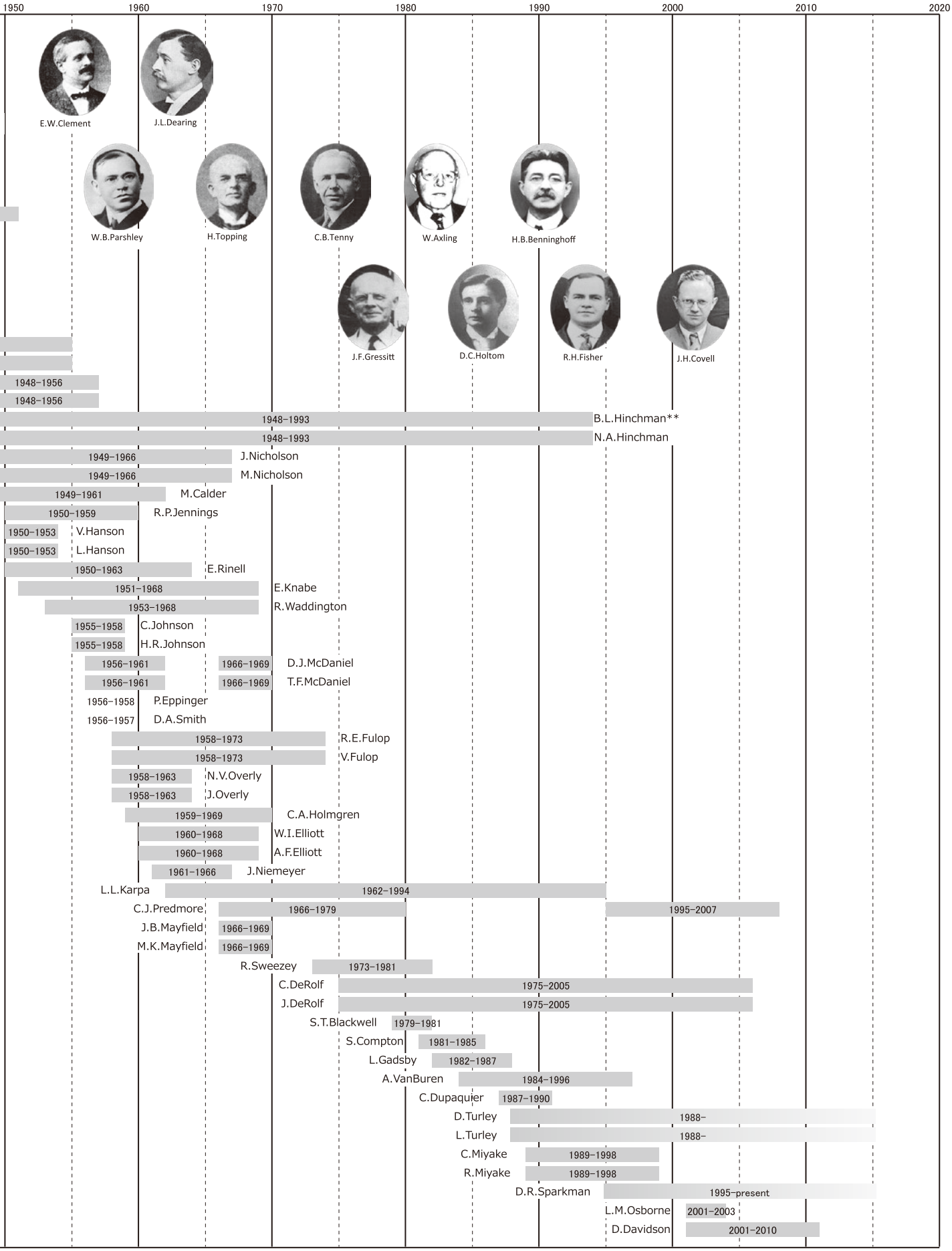
本表は ～『日本バプテスト同盟に至る　日本バプテスト史年表　（資料編）』2014年4月20日
日本バプテスト同盟発行～ を参照して図示したものである。
在任期間については関東学院以外の在職も含む。

日本に滞在した宣教師には下記のとおり色々なカテゴリーがあるが、この表では省略している
（先資料参照）。

【1】Missionary　　専任宣教師（アメリカン・バプテストの組織から主に任命された）
【2】Short Term　　1～2年の派遣宣教師
【3】Independent　　ABMU以外から活動資金を得ている宣教師
【4】Japan-3years　　第二次世界大戦後、日本救済のために超教派から3年間派遣された宣教師
【5】Special Service Worker　学校や団体へ1～2年間、派遣された宣教師
【6】Colleague In Mission　アメリカ・バプテスト承認による1年契約の学校教育宣教師
【7】Baptist Union of Sweden　スウェーデン・バプテスト宣教師

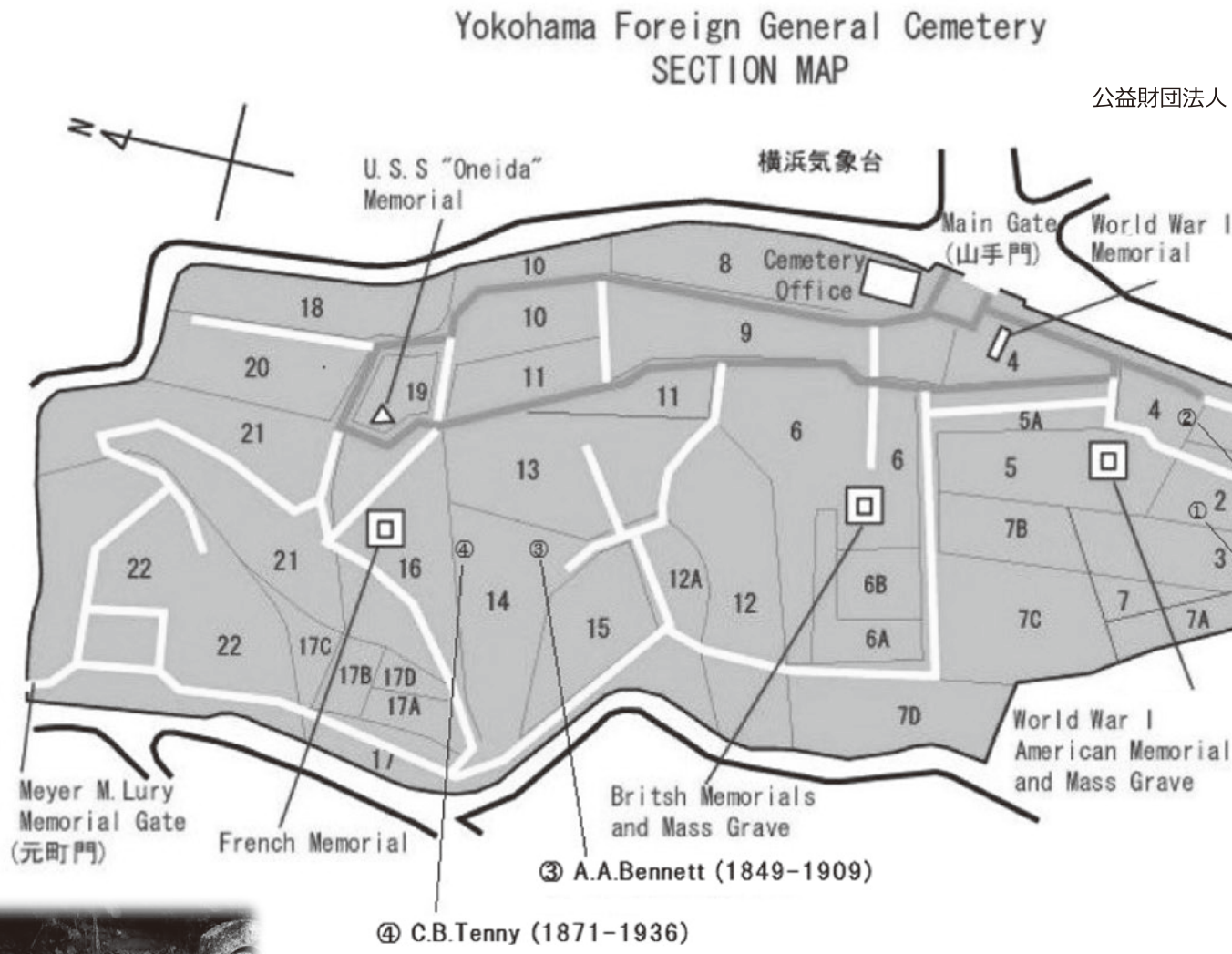
＊　原本には派遣先は仙台・盛岡・東京とあるが、関東学院にて理事・理事長として在職のため記載。
＊＊　原本にはW.Hinchmanと掲載があるが、関東学院内ではB.L.Hinchmanと表記することと
なっていると元チャプレンからご指摘があった（それに倣って表記をしている）。

関東学院 学院史資料室／編


1950
1960
1970
1980
1990
2000
2010
2020
E.W.Clement
J.L.Dearing
W.B.Parshley
H.Topping
C.B.Tenny
W.Axling
H.B.Benninghoff
J.F.Gressitt
D.C.Holtom
R.H.Fisher
J.H.Covell
1948–1956
1948–1956
1948–1993
B.L.Hinchman**
1948–1993
N.A.Hinchman
1949–1966
J.Nicholson
1949–1966
M.Nicholson
1949–1961
M.Calder
1950–1959
R.P.Jennings
1950–1953
V.Hanson
1950–1953
L.Hanson
1950–1963
E.Rinell
1951–1968
E.Knabe
1953–1968
R.Waddington
1955–1958
C.Johnson
1955–1958
H.R.Johnson
1956–1961
1966–1969
D.J.McDaniel
1956–1961
1966–1969
T.F.McDaniel
1956–1958
P.Eppinger
1956–1957
D.A.Smith
1958–1973
R.E.Fulop
1958–1973
V.Fulop
1958–1963
N.V.Overly
1958–1963
J.Overly
1959–1969
C.A.Holmgren
1960–1968
W.I.Elliott
1960–1968
A.F.Elliott
1961–1966
J.Niemeyer
L.L.Karpa
1962–1994
C.J.Predmore
1966–1979
1995–2007
J.B.Mayfield
1966–1969
M.K.Mayfield
1966–1969
R.Sweezey
1973–1981
C.DeRolf
1975–2005
J.DeRolf
1975–2005
S.T.Blackwell
1979–1981
S.Compton
1981–1985
L.Gadsby
1982–1987
A.VanBuren
1984–1996
C.Dupaquier
1987–1990
D.Turley
1988–
L.Turley
1988–
C.Miyake
1989–1998
R.Miyake
1989–1998
D.R.Sparkman
1995–present
L.M.Osborne
2001–2003
D.Davidson
2001–2010

横浜外国人墓地に眠る関東学院ゆかりの宣教師たち

公益財団法人



夫人グレースと令息ポールの墓

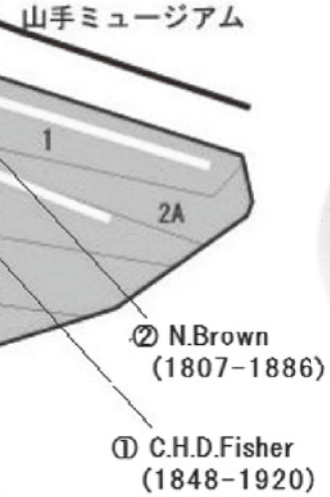
④ C.B.Tenny (1871-1936)

③ A.A.

学院史資料室編

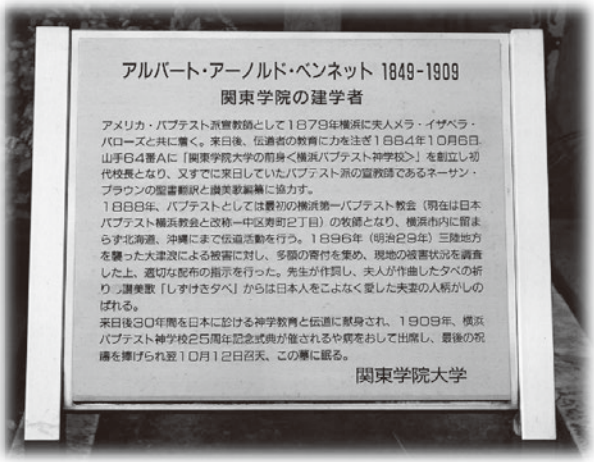
横浜外国人墓地/地図提供

② N.Brown (1807-1886)



① C.H.D.Fisher
(1848-1920)

Bennett (1849-1909)



学院史資料展　2018

「建学の精神と校訓『人になれ　奉仕せよ』の教育」

中学校高等学校からの報告

ボランティア実習体験 2018

～グリーンワーフ東戸塚にて～

＜奉仕時期、場所＞　2018年夏休み期間　8日間
グリーンワーフ東戸塚
＜参加者と人数＞　有志生徒 1日3 ～ 10名 延べ43名

中高では、毎年夏休み期間に「ボランティア実習体験」を行っています。このプログラムは、生徒たちが本校の建学の精神と校訓と向き合い、それを具現化するための小さな一歩を踏みだす機会と位置づけています。このプログラムの参加者は、中1から高3までの有志の生徒です。参加生徒は、夏休みの1日を福祉施設などで過ごし、様々な経験と学びをしています。生徒を受け入れて下さる施設の一つに、「介護老人保健施設グリーンワーフ東戸塚」があります。

本校の卒業生が職員として働いている施設として長年に渡って生徒を受け入れて下さっている施設です。「人になれ奉仕せよ　その土台はイエスキリスト也」という校訓のもとで生徒としての時を過ごした卒業生が、今、福祉の現場で活躍し、いつも笑顔で迎えてくれる事は、関東学院の建学の精神と校訓が時を越えて生きている事を感じます。ボランティア実習体験以外でも、本校のオーケストラ部と演奏による交流の機会も喜んでくださっています。また、施設に関心を持った生徒の希望を受け止め、時間を必要とするインタビューやアンケートにもいやな顔をせずに協力してくれるなど、いつも奉仕の精神でわたしたちに接してくだることは感謝です。ボランティア実習体験に参加した生徒もその姿勢を肌で感じるようです。

初めてのボランティア実習体験で施設を訪れる生徒は、緊張して施設を訪れます。そのような生徒たちに職員の方々は、今日1日どのように過ごしたら良いか丁寧に説明して下さいます。

実習体験を終えた生徒の感想には、施設の利用者の方々との交流からの学びだけではなく、職員の方々の行動からも学んだ事が記されています。「職員の方々は、利用者一人一人で対応を変え、細かな所まで気を配り、お年寄りと楽しく話しているのがすごいと思い、この仕事を大切にしているんだなと思った。」「職員の方々の行動に驚きました。職員の方々は、利用者の方の一歩先の行動を考えて動いていました。」「職員の方々の息のあった連携を見て、流石だなと思った。利用者の方々の前では常に笑顔でお世話をしていた。このことから利用者の方々のことを大切に思っていることが分かった。」参加した生徒たちは、福祉の現場の厳しさを感じながらも、人と人の交わりを大切にし、自分に与えられた様々なものと使命のもとで、思いやりとやりがいを持って行動することの大切さを学んでいるようです。

これからも関東学院の建学の精神と校訓と向き合い、それを実現していく教育を大切にしたいと思います。

関東学院中学校高等学校　宗教主任　佐藤洋晴

六浦中学校・高等学校からの報告

社会を変革するチカラ

～ NHK 総合テレビ『はじっこ革命』、 社会実験協力～

2018年7月15日、海水浴客でにぎわう猛暑の江ノ島海岸に、本校生徒の「募金活動にご協力をお願いします!」というかけ声が響き渡りました。とある募金活動の初日です。この日を皮切りに7月26日の最終日まで、桜木町駅前7日程、本牧海づり公園1日程、鎌倉二の鳥居付近1日程の全10回、各4時間、総計40時間の募金活動を行いました。

この企画は、学院が共同事業提携を締結している共同募金会[1]を通して、日本放送協会（以下、NHK）より、お声かけをいただいたもので、NHK総合テレビ『はじっこ革命』初回（2018年9月15日放送）の、社会実験を伴う募金活動への協力案件でした。「他の先進国と比して寄付額の少ない日本[2]。この課題に対して、少しでも前向きな解決策を見出すことはできないだろうか。」という番組制作趣旨に共感し、協力をさせていただきました。

＜募金活動実績が活かされて＞

この募金活動にあたっては、延べ40～50名のボランティアメンバーが必要とされました。実施日までの猶予は短く、その上、この時期は各クラブ活動の大会シーズンでもあります。しかし、そのような中でも、効果的な募金活動を検討するための貴重な社会実験の機会でもあり、募金活動の経験者でメンバーを揃えたい、という思いがあり、理想通りの人数確保ができるかは大きな不安でしたが、杞憂に終わり、総勢25名で無事に役目を果たしました。募金活動は初心者だと、適切な声量でかけ声を出せるようになるまでに1時間以上かかることもありますが、NHKのスタッフの方からの要請を把握し、速やかに堂々としたかけ声で呼びかける生徒の姿はたのもしく、これまでのさまざまな募金活動で培ったパワーを感じました。

なお、当初、本校協力の活動はVTRのみで取り上げられる予定でしたが、「『募金』のもつ堅苦しさ、心理的障壁を取り除き、身近な存在に近づけた好例として、その様子をスタジオで再現したい」とのことで、急遽、4名が収録に参加しました。

＜社会を変革するチカラ＞

今回の社会実験の様子は、番組ホームページ[3]にてご覧いただけます。既成概念にとらわれて見ると違和感がある募金形態かもしれませんが、その殻から抜け出てこそ「革命」です。今回の番組が、日本の寄付文化に一石を投じ、先進国の中で突出して低い日本の個人寄付額や寄付への意識が、少しでも変革することを願います。また、生徒がこれまで「“奉仕のこころ”で培ってきたチカラ」を、「社会を変革するチカラ」に用いてくださった神の御手に、感謝したいと思います。

関東学院六浦中学校・高等学校　教諭　手塚裕貴

[1] 本件のご担当は神奈川県共同募金会

[2] 参考:内閣府ホームページhttps://www.npo-homepage.go.jp/kifu/kifu-shirou/kifu-hikaku2018.10.1）

[3] https://www.nhk.or.jp/heart-net/hajikko/index.html

小学校からの報告

～庭の花を持ち寄りました 花の日礼拝～

「いろいろな花がたくさん!」「いい香り!」礼拝堂に入った子どもたちの目が講壇に引き寄せられます。今年は色とりどりの美しい花々に囲まれて、花の日礼拝をまもりました。例年は学校でプランターに育てている花を礼拝堂の講壇に飾ってきましたが、今年ははじめてのこころみとして「身近に咲いている花を1本、持ち寄って礼拝堂に飾りましょう」と全校児童によびかけました。礼拝の前日朝、子どもたちはまるで赤ちゃんを抱っこするかのように、大切に大切に花を抱えて登校してきました。持ち寄ったのは一人1本ですが、全児童の思いを集めると大きな大きな花束がいくつもできました。

礼拝で関東学院教会牧師の髙橋彰先生は講壇からあふれるばかりの花々を前に、「花がそれぞれに美しいように、みなさん一人ひとりに神さまは美しいもの、よいものをくださっています」とおはなしくださいました。

毎年、花の日の礼拝のために保護者の花の会「エクレシア」のみなさんが趣向を凝らしたフラワーアレンジメントをつくってくださっています。今年度も礼拝で講壇に飾り、礼拝後は日ごろお世話になっている方たちにキリスト教委員の児童が

「いつもありがとうございます」の感謝の言葉とともに届けました。また礼拝で子どもたちが持ち寄った花はそのあと、小学校玄関・廊下・教室、中高、学院などそれぞれの場所に飾られ、見る人の心を和ませてくれました。

礼拝は英語で“service”とも表されます。礼拝を通して神さまへ奉仕することを、小学校ではこれからも大切にしていきます。

関東学院小学校　教頭　辻　望

六浦小学校からの報告

「第 17 回タイ訪問団」

違いがあるままに、神さまの下で皆が平等に愛されているのだ

2018年8月15日(水)～21日(火)六浦小学校の第17回タイ訪問団一行は、今年もタイ・カレン族の村で交流を行った。今年の参加は4家族。3年目となる大石明徳さん(第40回生ヨシュア・ヨナタン組)と3年生の大石雫さん(第68回生ホセア・アモス組)、井坂梨恵さん(第40回生ヨシュア・ヨナタン組)と4年生の井坂堅希君(第67回生エリヤ・エリシャ組)と1年生の井坂隼之君(第70回生ヨシュア・ヨナタン組)、髙木和也さんと3年生の髙木梨沙さん(第68回生ホセア・アモス組)、武田敏宏さんと1年生の武田周さん(第70回生ヨシュア・ヨナタン組)。卒業生保護者のお二人は、小学生時代に島田・石塚から話に聞いていたタイのカレン族の人々との体験的な出会いを求めての参加。髙木さんと武田さんは、入学前から学校説明会などで知らされていて、大きな関心をもって入学し、参加が実現したという。髙木さんは娘さんの記憶に残る3年生くらいにと考え、武田さんは一日でも早く参加したい、させたいという思いでの参加となった。

15日夜にチェンマイに到着、16日～19日はティワタ村に3泊、19日はチェンマイに戻り、20日はチェンマイ市内の観光とバザーでの販売用のクラフト品の買い付け、そして21日の早朝、チェンマイを出発するというスケジュールであった。

20日の夜、今回のティワタ村訪問から得たものを皆で振り返った。参加保護者の振返りを紹介する。大石さん「3年目となる。娘に友だちができ、また会えることを楽しみにしていた。」井坂さん「私たちは恵まれている。当たり前ではないのだということが、分かった。日本に帰ってからもっと良く分かってくると思う。何らかの形で在校生や在校生保護者全員が関われるといい。」髙木さん「こういう機会があること自体が稀なこと。娘が入学した時から知っていて、いつか必ず行こうと思っていた。一度きりかもしれないから、娘の記憶にきちんと刻まれる年頃にと思い、3年生になった今年、参加することにした。玄関ホールの写真からティワタ村のことを想像したり、先生方に電話するなどして、イメージを膨らませて準備してきたが、実際に来たことによる感覚はそれをはるかに超えていた。人の声や、生活の様子、すべてが来てみないと分からない。実はタイ訪問団には特に決められた目的がない。参加者それぞれに考える余地が与えられている。そこが良い。日本とティワタ村。経済的な差、支援する、されるという意識の差、違いがあって、それでもみんなそれぞれの場所で違う豊かさや問題を抱えて生きている。しかし、子どもたちとの交流や話を通して、それらを超えた心の励ましをもらった。神さまの下で平等に愛されているんだと。みんなでカレン語の歌を歌った時の一体感は大きな収穫。これからどうすべきなのか。娘にとって感じたこと全てが糧となるはず。たとえ来年行くことが叶わなくても、今回ティワタ村とのつながりが造れたことに感謝。」武田さん「すごい経験ができた。私は、タイ料理はダメ、つらいなーと思った。町の独特のにおいがダメ。苦手だなーと思った。ティワタ村についた。もっと悶々としてきた。ところが、一晩寝て開き直った。すると気が楽になった。他のお父さんやお母さんたちの子どもたちとのかかわりを見て、すごいな、と勉強になった。2回目はもっと楽しくなると思う。」島田先生「人と人とのつながりが重要。私は、井坂さんの1・2年の時の担任。彼女が、息子二人を連れて参加したことが本当にうれしかった。教師冥利に尽きる。幸せを与えてもらった。出会いとつながりを大切にしたい。」通訳の関東学院大学出身の安倍砂貴さん「六浦小とのつながりをとても大事にしている。初めは言葉が通じない。お互いに戸惑って始まる。それが、崩れる瞬間が訪れる。そして、お互いに理解し合っている現場を見るのが毎年楽しい。お父さんたちが高校生たちと交流し、心が通い合う現場が楽しみ。ティワタの子どもたちは、日本に友だちがいることと、その友だちが遊びに来てくれるのをいつも嬉しがっている。それから、お父さん、お母さんたちが少しずつ具体的な行動を起こすことにはまっていく。『どうしたらいいだろうか。何かできないだろうか。』と変わっていく姿を見るのが楽しみ。六浦小学校のタイ訪問団とのかかわりがわたしの人生を豊かにしてくれる。」

関東学院六浦小学校　教頭　石塚武志

のびのびのば園からの報告

地域連携活動「のびのびの場」

のびのびのば園では地域連携活動の一つとして、昨年度から「のびのびの場」をスタートしています。のば園を卒園した小学生、近隣の小学3年生～6年生を対象にした居場所作りとして、昼食の提供と遊びの場を設けています。昨年度から5回開催され、この夏には3回行われました。

卒園児だけではなく近隣の小学生が遊びに来る姿が見られました。昼食のメニューについては管理栄養士と相談しながら、小学生が喜ぶようなメニューを試行錯誤しながら考えています。8月23日には栄養学部と教育学部の学生の方々にもボランティアとして協力してもらっています。23日のメニューは焼きそばととうもろこし、ジャンボウインナー、栄養学部の学生が考案した手作りデザートでした。35人の小学生がのば園を訪れ、食後には学生達によるゲームコーナーもあり、賑やかな、楽しいひと時となりました。グループになってゲームを楽しむ子もいれば、一人でのんびり本を読んでいる子、宿題をする子と、過ごし方は様々です。地域に開かれていくこども園として在園児だけではなく、卒園児や小学生の心地よい居場所作りを目指していきたいと考えています。

9月1日には「ゆうべのつどい」が開かれました。園庭と園舎を解放して、夏の終わりのひと時、園児と保護者が楽しめる時間となっています。ゲームコーナーや、かき氷、ポップコーン、ホットドック等の食べ物コーナー、お楽しみコーナーがある中、今年度初めて地域のコーヒー店から協力を頂きアイスコーヒーを出店する事ができました。又、ホールでのお楽しみコーナーでも初めてゴスペルフラを紹介することができました（讃美歌に合わせてフラダンスを踊ります）。在園児だけではなく、卒園児の家族の方々、地域の方々、学院関係者の方々等、本当にたくさんの方々がのば園に足を運んで下さいました。のば園に集う皆が笑顔で過ごせた時間となり、感謝の気持ちで「ゆうべのつどい」を終える事ができました。これからも地域に開かれたこども園として、地域と連携できることは何かを考えながら祈り、歩んでいきたいと思っています。

関東学院のびのびのば園　副園長　平　幸子

六浦こども園からの報告

障がい者活動ホーム「金沢福祉センター」と生活介護事業所「朋」との交流

六浦こども園では長年に渡り、障がい者活動ホーム「金沢福祉センター」と生活介護事業所「朋」との交流を行っています。今年度も6月12日に花の日礼拝のあと、年長組が「金沢福祉センター」へお花をお届けに行きました。前日には、訪問するクラスが、センターにいる方々への質問を考えました。当日、センターに到着すると早速、お花をお渡しし、前日に考えた「どんなお仕事をしてますか?」の質問をしました。センターに通う方からはクッキーやかご、アクセサリーなどを作っていると教えて頂きました。そのあと、お仕事のお部屋や給食室をみせていただきました。終始あたたかく接し、一生懸命伝えてくださるセンターの方々のお話しに、子どもたちは目を輝かせて聞き入っていました。最後にこどもたちは声を合わせて「にじ」の歌をプレゼントしました。歌い終わると「みんなの歌を聴いていたら元気が出てきたよ。ありがとう。」と言っていただき、みんなが嬉しい笑顔になりました。数日後、散歩に出かけたところから福祉センターが見えると、子どもたちは「聞こえるかなー。ヤッホー!」と呼びかけました。

すると福祉センターの方々が気づいて手を振り返してくださいました。このようなあたたかな出会いとやさしい気持ちが他者を思いやる心を育み、多様性のある社会を担う子どもをつくっていくのではないかと思わされました。

また同日、生活介護事業所「朋」へ本園文化部の保護者の方々が、みなさんから集めたタオルを裁断して作った清拭タオルとともに、礼拝のお花を花束にして届けてくださいました。お花は、朋に通われている一人ひとりに直接手渡されました。言葉での表現がなくても、嬉しいという気持ちがとてもよく伝わってきました。朋に通われている方々は車椅子や寝たきり、言葉を上手く発することが出来ませんが、スタッフの方たちは一人ひとりの思いを尊重しながら日々の活動を行っています。施設内に閉じこもることなく、地域の子どもたちと交流したり買い物に行くなど、外に出ることも多く、関東学院大学のチャペルコンサートにもよく出かけるとのお話しでした。行かれた保護者の方は、「緊張しながら伺ったがスタッフの方々が明るくはつらつとしており、とてもあたたかい雰囲気に感心しました。」「重度重複障がい者の方と接する機会を持ったことで、障がいがあるということや施設で働く人たちへの関心を持つことができました。」「障がい者は決して何もできない人たちなのではなく、感情も自分の意見も持ち合わせた一人の人間で、必要なサポートさえ受ければ、社会で生きていける存在なのだと感じました。」などの感想を寄せてくださいました。愛は知ること、関心を持つことから始まるとマザーテレサは言っています。同じ時代、同じ社会でともに生きる隣人を知る機会となり、感謝でした。

そして6月30日の六浦こども園おりぶ祭には「社会福祉センター」と「朋」の方々がきてくださいました。施設で作っているクッキーやかご、ハーブソルトや染物を販売し、あたたかい交わりのときとなりました。こども園を通した出会いが、心のバリアフリーを生み、大人も子どもも、他者に心を寄せることから、奉仕する心につながっていきますようにと祈ります。

関東学院六浦こども園　園長　根津美英子

大学からの報告

2018 年度東北ワークキャンプ ～震災ボランティア活動～

宮城県仙台市若林区荒浜。海岸には防風・防砂の為の松林が続き、その内側に約2,000人の人々が暮らしていた。地域のつながりも強く、荒浜小学校の校庭を会場にした地区別対抗の運動会やお祭りが盛大に催されていた。そんな平和な村を2011年3月11日、巨大な津波が容赦なく襲った。

2018年度のワークキャンプのプログラムに、この荒浜小学校跡を加えたのは、復興が進み被災した地域の面貌が一新し、震災の記憶が薄れる中で、この地域だけは時が止まったように荒野が広がっていたからである。かつて多くの人々が暮らしたであろう集落の真ん中で、様々な生業を見つめ、場所を提供したであろう四階建ての校舎がぽつんとさびしそうに佇んでいた。何かを語りかけるように。

荒浜小学校校舎

利府オアシスチャペルで研修

ここは2018年春に仙台市によって震災遺構として整備されたものである。整備に当たって、震災当時の様子をできるだけ残そうということで、津波に襲われた2階までは当時のままであった。そして4階には震災前の荒浜地区、震災当時の様子、そして復興計画が展示されている。東北各地で震災前・震災当時・復興後をテーマにした資料館、記念館が数多く作られているが、教室の窓から周囲の荒野を眺めながら資料を見比べると、その各々の状況がよくわかる。特に津波浸水域となり居住が制限された為、校舎周辺にはまさしく一面の荒野が広がるばかり。南三陸志津川地区は、新たな町づくりに活気が感じられたが荒浜には人影がない。巨大災害に見舞われ、故郷を後にしなければならなくなった皆さんに思いを馳せる。

その志津川地区に今年もお邪魔した。今年で８年目になる。旧志津川駅の東側に広がっていた中瀬町行政区が集団避難の結果、仮設住宅を中心にしていた地区として助け合いを継続してきた。昨年、志津川高校に隣接した山を切り崩した高台に新たな住宅地を建設し名前も「西が丘行政区」となって再出発をおこなった。災害公営住宅や真新しい戸建て住宅地区となった今はフィジカルな活動は必要ない。逆に私たちがお邪魔して、地区の方にいろいろなお話を聞くことで風化していく震災の記憶を継承させてもらうことが活動の中心になってきている。

志津川での交流会

大災害は直接被害を受ける以外にも、支援する立場に立たされる困難さもある。仙台と松島に挟まれた利府町。内陸だったために津波の直接的な被害は少なかったものの、沿岸部の被災地救援の最前線になっていった。利府オアシスチャペルを訪問し、松田牧師からお話を伺った。救援活動のためのNPOを立ち上げ、主宰するキャンプ場をボランティア活動の拠点として提供するなど、重要な役割を担われた。お話の中では、その困難さも率直にお聞きできた。翻って自分が同じ環境に立ったとき、はたしてどこまでできるだろうか。まさに、どれほど奉仕ができるだろうか。いろいろ考えさせられた2泊3日であった。

関東学院大学　学生支援室　鈴木康夫

かつての荒浜地区を前に説明を受ける

志津川西が丘行政区の皆さんと

◆ニューズレター No.21 収録記事に関する修正

P.18　Ⅱ 関東学院各校役職者表『学院長の任期』
　　富田富士雄 1968-1970（変更）
　　友井篤 1970-1977 ※院長事務取扱（追加）
P.27　一覧表、資料番号 8 終身科（誤）→ 修身科（正）

◆ニューズレター No.22 記事掲載あたり

水船六洲（州）の氏名標記については人事課記録に基づき「洲」とする。
片小沢（澤）千代松の氏名標記については本人のサインに倣い「沢」とする。

◆学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆さまに学院に関係する資料・情報の寄贈をお願いしております。
近年はデジタルアーカイブ構築のため、データを収集する目的で皆さまより資料をお借りして電子データを作成し、データ登録する業務も行っております。お借りした資料は処理が終わりましたら返却させていただきます。
お手元にあります学生時代のお写真や学院のパンフレット、式典、学祭の配布物など、大切な記録かと思いますが、学院史資料の収集にご協力いただけますよう、お願いいたします。資料のご提供については以下にご連絡ください。

学院史資料室
Tel:045-786-7066, E-mail:archives@kanto-gakuin.ac.jp

編集後記

学院史資料室のニューズレター第 22 号を発行するにあたり『関東学院の歴史と宣教師』というテーマを取り上げました。関東学院の歴史は設立当初よりアメリカンバプテストの支援を受け、多くの宣教師たちが礎を築き、チャプレンに支えられてキリスト教教育が行われてきました。横浜バプテスト神学校（第一の源流）から 130 年を超え、関東学院という名前が横浜に誕生して 100 年を迎えました。

今回の宣教師に関する記事の収録では学生時代に教えを受けた大島良雄先生、佐々木敏郎先生にお力添えをいただき、忘れることのできない特集が完成しました。

現在、学院史資料室で所蔵する実物資料は 2 万件を超え、タイトルでの管理から資料番号の管理へと移行しました。バックアップを兼ねたデジタル化作業も順調に進んでいます。デジタル資料は粒子が細かいこともあり、5 万件に近づきました。近い将来、データベースによる運用に切り替え、デジタル・アーカイブズとして提供できるものと思います。

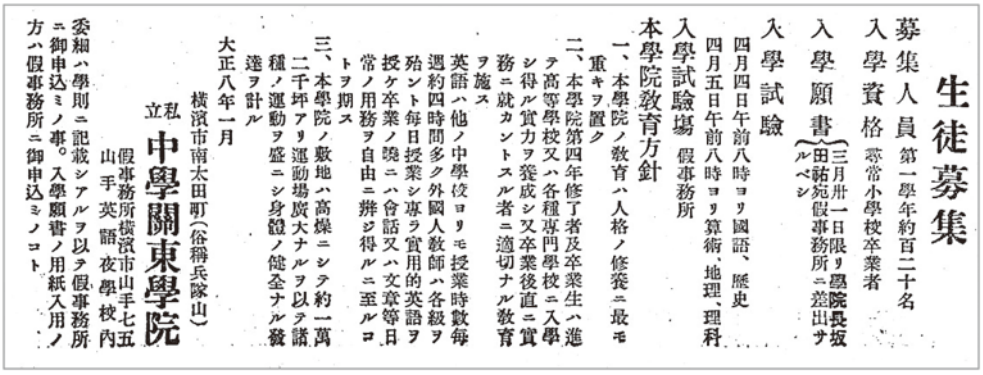
学院史の資料整理は先生方と卒業生たちの熱い思いに支えられて続いています。近年のテーマでも、No.20 の『学生寮特集』は故香川詔士先生により完成しました。No.21 の『坂田祐特集』では直接坂田先生をご存知の海老坪眞先生に多くを教えていただきました。今回の宣教師特集では高野進先生、帆苅猛先生、海老坪先生など、著名なチャプレンの協力をいただいております。多くの卒業生に思い出の写真や当時のノート、記録を提供していただきました。

学院史資料展 2018「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」と題して、学院内各校から寄せられた記事を掲載しました。この数年間連載している各校のボランティア活動の今年度の報告です。各校の協力により作られる歴史のひとコマであり、多くの方のご支援に感謝いたします。

関東学院の礎にあるのはキリスト教教育と奉仕の精神です。幼児・小学生・中高生・大学生がそれぞれに取り組んた奉仕活動を本誌を通じて、ご紹介できることを嬉しく思います。

1919 年に中学関東学院が横浜に創立されました。100 年前に基督教報へ掲載された「生徒募集」の記事には「本学院教育方針」の最初に「一、本学院の教育は人格の修養に最も重きを置く」とあります（下図参照）。建学の精神である『人になれ』が創立当初に掲げられており、100 年経った現在もその校訓に基づいた教育が行われていることが関東学院で長年を過ごした私には誇らしく思います。

学院史資料室　外崎 みゆき


生徒募集
募集人員 第一學年約百二十名
入學資格 尋常小學校卒業者
入學願書 三月卅一日限リ學院長坂田祐宛假事務所ニ差出サルベシ
入學試驗 四月四日午前八時ヨリ國語、歴史
四月五日午前八時ヨリ算術、地理、理科
入學試驗場 假事務所
本學院教育方針
一、本學院ノ教育ハ人格ノ修養ニ最モ重キヲ置ク
二、本學院第四年修了者及卒業生ハ進テ高等學校又ハ各種專門學校ニ入學シ得ル實力ヲ養成シ又卒業後直ニ實務ニ就カントスル者ニ適切ナル教育ヲ施ス
英語ハ他ノ中學校ヨリモ授業時數每週約四時間多ク外國人教師ハ各級ヲ殆ント每日授業シ專ラ實用的英語ヲ授ケ卒業ノ曉ニハ會話又ハ文章等日常ノ用務ヲ自由ニ辨ジ得ルニ至ルコトヲ期ス
三、本學院ノ敷地ハ高燥ニシテ約一萬二千坪アリ運動場廣大ナルヲ以テ諸種ノ運動ヲ盛ニシ身體ノ健全ナル發達ヲ計ル
大正八年一月
横濱市南太田町（俗稱兵隊山）
私立 中學關東學院
假事務所横濱市山手七五
山手英語夜學校内
委細ハ學則ニ記載シアルヲ以テ假事務所ニ御申込ミノ事。入學願書ノ用紙入用ノ方ハ假事務所ニ御申込ミノコト

関東学院中学校高等学校設立 100 周年記念事業
出版書籍の紹介

関東学院中学校高等学校 100周年記念誌

関東学院中学校高等学校の100年の
歴史を振り返る写真集です。

記念写真集（カラー印刷）
A4サイズ　80ページ
2019年5月発行予定
発　行　学校法人　関東学院
発行所　株式会社　大川印刷

新編　恩寵の生涯（復刻版）

2019年1月27日100周年記念式典にて
出席者に配布しました。

新編 恩寵（おんちょう）の生涯（復刻版）　（非売品）
関東学院中学校高等学校設立 100 周年記念事業

2018 年 12 月 20 日　復刻版第 1 刷発行
著　者　坂田（さかた）　祐（たすく）
発行者　学校法人 関東学院
発行所　株式会社 関学サービス
〒 236-8501　横浜市金沢区六浦東 1-50-1
Tel.（045）786-7028（代表）

学院史資料室

KANTO GAKUIN Archives
関東学院学院史資料室 ニューズ・レター　第22号　発行日　2019（平成31）年3月1日
発行人　関東学院 学院長　松田　和憲
編　集　『関東学院学院史資料室ニューズ・レター』編集委員会
〒236-8501　横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL.045-786-7066　FAX.045-786-2932
再生紙を使用しています
2019.3.1.1100